



「かいだなか」物語

山浦塔夜男著

特109
446

~~12/8
1909~~

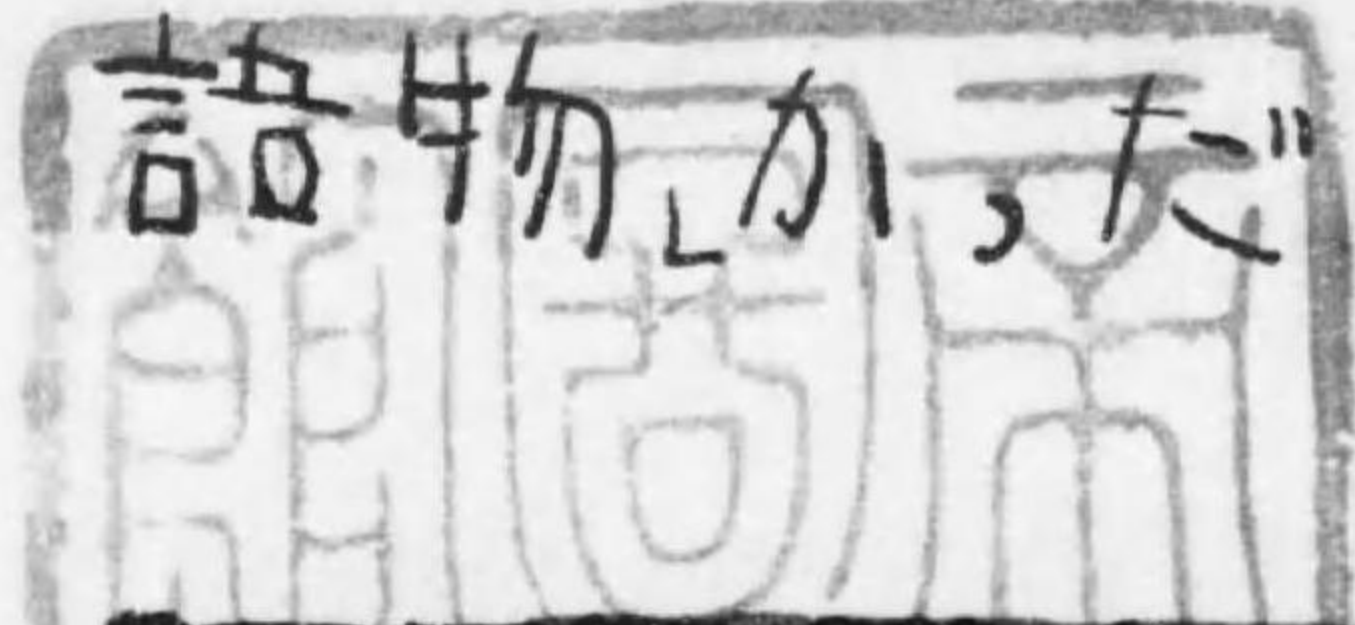


始



特109

語物「かた」うさ 7446



大正
7. 8 17
内交

著男夜塔浦山

とらだつたか物語

目次

大正橋の心中.....	一
べらんめい物語.....	三四
小さき岡半の群れ.....	四七
お化けの晩.....	六七
ぜんざい十一杯.....	八九
踊りの場.....	一一三
或る會社の日記.....	一二七

大阪を立ち退いて……………一六二

船場の正月……………一七三

十日夷……………一七六

曾根崎の春宵……………一七九

牡蠣船……………一八一

櫻の宮……………一八四

——(さうだつたか物語 をはり)——

さうだつたか物語

山浦塔夜男著

大正橋心中

大阪の花街は古來美しい心中話に富んでゐる。元祿十六年に出版された『心中戀の塊』には京阪堺の心中名寄所付十八項を書き記してその終りに、(此外珍敷心中出来次第跡より書加え追々出し申候方々に名のなき心中數多之れ有り候得共茲に略す)と斷つてある。

私は今、その作者の志を繼いで近頃事新らしい情死ローマンを茲に

一つ緩り足して置かうと云ふわけ。

勇之介は何日になく酒を煽つた。この宴席に連つて居る同僚の裡で誰れ一人として今迄に勇之介のこの酒量を知つて居た者は無かつた。皆んなの驚異の裡で勇之介は果てしも無く盃を重ねるのであつた。憂を拂ふ玉箒、勇之介の心はたい酒を呑んでる時丈けが暗い影から放たれて居たのである、それで彼れはこの頃酒を呑み習つたのであつた。

「軍艦が船渠へ這入るとえらい馬力が出るもんやなあ。」

「今晚は二次會へ一つ御案内をせうやないか。」

軟派の面々は勇之介の呑みつぶりを嬉し相に打ち眺めてひそ／＼とこ

んな密議を凝して居た。座は亂れ立つて通俗的なやとなの三味線を圍んでそこ此處に群が造られた。

「切り上げようやないか。」

「そやなあ、善は急げや、増田はんはんに當つて見いな。」

「貴方聞きいな。」

軟派の連中は恚う囁き合ひ譲り合つてやがて一人が勇之介の傍へやつて來た。

「なあ増田はん、やとなの糸に乗つて騒いでもハツミまへんよつて、一つ川岸を換へてアツサリ呑み直しまへうやおまへんか。」

「そうおすなあ、一つ何處ぞへ伴れてつとくなはれ、恚うなつたらもう何處へでも御伴しまつせ。」

勇之介は無造作に軟化して了つた。

「何せ私等の事だつさかいに、好え御茶屋は知りまへんせ。」

悪友は恚う云つてやがて勇之介を中筋の大安へ伴ひ込んだ。だがそれは死骸をつれ込んだ様な物だつた。元々いけない處を無理に呑んだ酒、それが悉皆り廻つて了つて勇之介は俥を降りると直ぐに二階へ引つ張り上げられてそこへグタツと寝こんで了つた。外の軟派の連中はそんな事にはお關ひ無しで馴染の藝妓を上げて呑めや唄への大陽氣、その裡に誰の差圖か人数丈の娼妓が送り込まれて來て別の座敷で時を待つ。

「さあそんなら最うお引けにせうやないか。」

幹事役が鶴の一聲、藝妓が歸る。

「増田はんには一等好いのにせんならんせ。」

「そや／＼後は最うどうでも好えやないか。」

「そんなら籤引せうか。」

賑やかな詮議のあとで一團の浮かれ男と浮かれ女とはかやく飯を喰べて寢床へ這入つた。勇之介丈は最うその前から狭い部屋へ柔い蒲團を布いて寝かされて居たのであつた。

「まあシャツ着たなりで寝てはるわ、モシモシ。」

女將の指金で勇之介に振り當てられた「君の家」の抱へ數江はその部屋へ這入るといきなり驚いて勇之介を揺り起した。

「ウーン、だんない抛つといて」

寢言の様に呟やいて勇之介は未だ死んだ様に眠りを續けて居た。

「まあ究屈そうやわ、コンナ物つけて。」

數江はせめてカラ丈けを外して上ようと思つたが洋服の作法を知らな
い妓にはそれも出来なかつた。

『セウの無い人やしなあ。』

未だ廓なれない數江は手持無沙汰な格好で長襦袢一枚で勇之介の枕元
に座つてゐた。そして若い美しい勇之介の無邪氣な寝顔をヂツと眺めて
居る程にもう堪らないとしさが湧き起つて来てそれが胸一杯になつて
來た。

「恁麼好え男はんと枕を交せるのも此の商賣の冥利やなあ、そやけど此
方で思ふお方は淡泊してはるし、厭やと思ふお客はんは執念うしやは
るし本統に情ない事やしなあ、そやそや此のお客はんかて最う此れぎ
りや知れえへん、怎うやら妾等なんぞを對手にしやはる様なお人や無

さそうやもんなあ。』

數江はそう思ふともう無理にも叩いていも抓つてでも起してシャツを
脱がして寝巻と着換へさしてそして自分の存在をも認めさせて心置きな
く添寝をしたくつて矢も楯も堪らなくなつて來た。だが泥水に染みさら
ぬ數江には未だそんな氣の利いた真似は出来なかつた、それに今では惚
れた弱味さへが手傳つてゐた。夜具の震動が勇之介の夢を驚かさな
いと數江はソツト同じ寢序へ這入つて、怖ろしい物の様に難れてヂツと
勇之介の寝顔を飽かず眺め入つてゐた。

酒の作用は睡眠を深くさせる代りに早く醒まささせる。數江が眠りに就
くと勇之介は眼を覺ました。未だ頭は酒に燃えてゐて身體が倦い。不圖
眼を見開くと怎うやら家の容子が異つてゐる様だ。ハテ何處なんだらう

と思つて見廻そうとすると首の廻りが究屈である。ホワイトシャツを着た儘子クタイ迄結んで寝て居るのであつた。然かも自分の脇には艶いた女さへ寝てゐる。

「ハテ、昨夜は北村技師の送別會やつたと、そんで俺は皆なが珍らしがりよつたさかいに拍子に乗つて酒を呑んだと、それからツと、それから怎うしたんやろう、そや〜俥に乗つて橋の上を通つた。冷たい川風が頬邊へ當つてえ、氣色やつた事が一寸あつたと、そいだけや、そいだけつきや覺へはないなあ。」

酔つぱらうと健忘症になつて了う勇之介には怎うしても此處が何處であるか分らなかつた。

「一體あれから怎ないしたんやろう、醜態を演せえへなんだやろかな、

そいで何處へ來てるんやろう。」

思案にくれて譯を聞いた相に隣にゐる女の寝顔を眺めて勇之介は打ち驚いた。そして暫くシゲ〜と見詰めた末漸く安心した。

「まあ驚いたこと、お由かと思ふて吃驚した。そやけどよう似た顔やなあ。」

恁う云つて勇之介はまたその妓の寝顔を泌み〜と見入つたのであつた。

勇之介は京都先斗町のお茶屋の息子で京都大學の出身なのである。一昨年の夏優等の成績で土木科を出ると直ぐに大阪市役所へ奉職したのであつた。そして兼ねてから想思の仲であつたお由さんと天下晴れての新家庭を築港四條通りに營んだのであつたが、月に叢雲花には嵐の譬へに

洩れず満つれば缺けて此の夏あたりから愛妻のお由さんは胸の病ひに惱む身となり、今では醫者の勧めに従つて京都へ歸つて養生を専らにしてゐるのである。勇之介を酒に誘いた心の影も明け暮れ傍に居て甲斐々々しく世話をして呉れてゐた戀女房の姿を見失つた侘しさであつたのだ。

二

勇之介の胸の裡には相も變らず愛妻お由の戀しさがわだかまつて居る眼の前には病にやつれたお由の蒼白い顔が絶へずちらついてゐる。だがそれが此頃ではお由の想ひに胸を焦し夢心地に幻を見つめて居ると血の氣の失せたお由の顔がやがて次第に元氣づいて來て見る／＼肉が出來て來る。そして終いにはニコリと妖艶な笑を湛へてそれが數江の顔に代る

様になりだしたのであつた。

勇之介の心にはお由の戀しさが募ると其れと一緒にまた數江と云ふ妓が忘れられなくなつて來だした。もうお由と數江との差別が付かなくなつて來だした。お由だと思つて數江に會つてやればそれがお由に對しての慰めになる様な氣がし出した。お由に會つて慰めてやる事の出來ない身はせめて數江に眞心を注いでやろうと思つた。勇之介はそれを決してお由に對する不徳義な行爲だとは意識しなかつたのであつた。彼れはもう逆上せ上つて居た。だが勇之介は色街で育つた癖に一向そうした方面の消息に不案内だつた。『増田の若旦那はんはほんまに堅いお方どすえな』と先斗町界限に噂をされた堅固な行狀が今では仇となつた。怎うかしてせめて數江に會ひたい。數江に會ふ家を見付け度い。だが南地で知

つてる家と云つては此の間行つた大安丈げしか無い。あそこへ行くと忽ち同僚に知れて了ふ。藝妓ならば兎に角娼妓に夢中になつてると云はれるのは少し恥かしい。何處かコツソリ遊べる家は無い物かしらん。勇之介は思ひ亂れて當てども無く南地の華やいだ巷へ彷徨ひ込んだ。

「せめて數江の屋形を見とこう、殊によると一目でも會へるかも知れへん。」

勇之介はそう考へて中筋の通りを軒燈を見て歩いた。すると軒燈に「一現」と云ふ文字がチラ／＼眼に這入つた。

「うんそうや、一現へ行つたれ。」

戀は人を大膽にする。勇之介はその邊で一番大きそうな一現茶屋を目掛けて飛び込んだ。

「妓さんはどなたです。」

「數江いふ妓聘してんか、何でも店は伊勢の戸たらやせ。」

勇之介は忙しく扇子を使ひ乍ら戀ひ焦れ切つた數江の姿が現はれる。

「時」を待つた。その扱店は直ぐ近所だと見へて仲居は電話を掛けずに小婢を走らせた。その使は間も無く歸つて來たのだが、勇之介に取つては随分おちつたかつたのだ。仲居が上つて來るのを待ち兼ねて勇之介は直ぐ尋ねた。

「どうぞです。」

「數江はん出來まへんねん、誰れぞ代りの妓はんにしとくなはれな。」
仲居は恚う答へて、くりだしを勇之介の前へ擴げて見せた。勇之介はそんな物に頓着は無い。

「そんなら貰ひ掛けてんか。」

「南地丈なごいだけけわなア娼妓しやうぎはんの貰ひは利りまへんねん、えらい折角せつかくだつけどなあ。」

「そうかあ源助げんすけやなあ、どないぞして會あへる工風くふうはおまへんやろうかなあ。」

あ。」

勇之介ゆうのすけは當惑たうわくそうに仲居なかひに歎願たんぐわんをした。

「まあ仲迎なかつかへになつたらなあ、一寸耳ちよつとみみへ入れて見ても宜よろしいねんけど、其れかて來きやはるや來きやはれへんや分わかれえしまへんせ。」

「仲迎なかつかへ云いふたら何時なんじどす。」

「十一時半じはんだんがな。」

「そんなら十一時半迄じはんまで待つてゐるわ、それ迄散財さんざいするよつて二三人にんげい藝子ぎしを

聘よんでんか。」

勇之介ゆうのすけは急きふに力ちからを得えて憊かう頼たのんだ。

「貴方あなたそんな勿體もったいない事ことせんかて代りかはりで遊あそんどきなはずたらよろしいがな、數江かずえはん見みたいな別嬪べつびんはん見み立てたげまつさ。」

「いや、數江かずえはんには一寸話ちよつとはなしが有あるねんさかいに、まあ呆乎ほんやう待つてゐるのもあんたんとこ氣きの毒どくやさかい其それまでつなぎに散財さんざいしてゐるわ。」

勇之介ゆうのすけは無理むりにそう命めいじて了しまつた。そして仲居なかひが、置き捨すて、行いつたぐりだしを珍めづらし相さうに眺ながめて酒さけの用意よういを待つて居ゐた。程ほどなく酒さけの仕度しどが出來できて續つづいて歌うたひ女の姿すがたが座ざを彩いろどつた。賑にぎやかな絃つるの音ねが湧わき立たつたが勇之介ゆうのすけは唯ただにこゝとして盃さかずきを重かさねてゐるばかりであつた。

「何なんぞおうたひ、なあ稀たまには蟲干むしほじするもんだつせ。」と催促さいそくをしあきた妓かん

は悉皆見切りをつけて拍子を落して覺束ない合の手の御復習をし初めた。唄はうたへなくつても三味線の拍子は聞き覺へた勇之介にはその藝妓の見くぶり方を腹立たしく思つた。そして心の裡で早く十一時半になつて呉れ、ば好いと只管その事ばかりを思つてゐた。

待ちに待つた中迎へが來たが數江はとうと來なかつた。それを聞いた勇之介はがつかかりして其場へ寢込んで了つた。一時に酔が廻り出したのであつた。

『もう歸ぬのは面倒臭い、此處へ寢さしといてんか。』

揺り動す仲居に斯う頼んで又もや高軒

『セウの無いお方やしなあ、そんなら明日の朝になつたら數江はんも明さまつしやろうよつて、ほいたらヂツキ招びまつさ。』

仲居も勇之介の心事がいちらしくなつたか恚う云ひ聞かせて其處へ夜具を運んで來た。

三

勇之介はぶい漬のお膳に向つて迎ひ酒のお猪口を甜めてるところへ數江が這入つて來た。そして勇之介の姿を見るといきなり大袈裟な聲を出した。

『まあ、貴方はんだしたんか、えらい濟みまへんでした。』

『あんた、昨日の宵から來て待つてはつてんし。』

仲居はそう説明をして直ぐに出て行つた。

『何卒堪忍しとくなはれや、お客はんゑらい酔ふてはりましたなあ、ど

ないしても歸なして呉れはれしまへなんでん、まだ寢てはつてんけどソオツと逃げ出して來ましてんせ。』

數江は云ひ譯をし乍ら勇之介の傍へ寄り添つた。

『よう來て呉れた、おほけ難有う、貴女の顔を一眼見たらもう思ひ置く事更になしやさあ、遅うなるといかいわ、御給仕して貰ほう。』

勇之介は茶碗を取り上げて數江に差し出した。

『貴方もう歸にはりまんの。』

『役所へ行かんならんねん、もう遅刻や。』

『そうだつか、本統に濟みまへなんだなあ、堪忍しとくなはれや、どないにしても行かんなりまへんのん。』

『俺も心残りやけど——まあ貴女の顔を見たさかい之れで氣が濟んだ。』

『あんな氣が濟みなはつたか知りまへんが、妾は氣が濟みまへんわ、なあ、少しゆつくりしなはれな。』

『ふうーん、そやなあ。』

勇之介の手はまた盃に移つて行つた。數江は御銚子を取り上げたが輕かつたので、

『ねえちやん、御銚子つけとくなはれ。』

と下へ對つて吐鳴つた。

『そんなら役所へ電話かけて來るわ。』

勇之介は下へ降りて行つて、頭が痛いから今日は休みますと云つて斷つて了つた。

勇之介の姿はそれからチヨイ／＼その槌家へ現れる様になつた。勇之介はいつも夕飯を済ますと直ぐに、未だ明るい裡に行くんだがそれでも數江は大概明いてはゐなかつた。

「ほんまに數江はんはよう賣りはる、別嬪はんで温順しうて如才ないさかい身體に明き間があれしまへん。」

出來ない時には仲居は定まつて恚う云つて數江を賞めるのだつた。數江はその數の多いお客の裡で勇之介を一番いとしがつて居た。それで勇之介は特別の便宜を直ぐに獲得した。勇之介の傳言は何時でも直ぐ數江の耳に取り次がれる様になつた。「槌家から貰ひだす」と男衆の口から數

江の耳に囁かれると數江は最う大概のお客に無理を云つて飛んで來るのであつた。だが仲には「一寸挨拶にやつとくなはれ」と頼むと尙更意地になつて歸さないでその儘流連をする様なお客もあつた。すると勇之介も其れに張り合つて遂にする／＼に役所を休んで了ふと云ふ様な事にも成るのであつた。そこで勇之介は數江に會はうと云ふ日には晝間つから電話をかけてお花を付けて數江を契約して置く事にし出した。そんな日は屹度その前に數江の方から勇之介に電話がかゝつて行くのであつた。

「藤田はん云ふ人から電話だす。」

給仕が恚う取り次いで來ると勇之介は「ウンそるか」と感情を殺してブツキラボウな調子でうなづいて電話口へ出て行くのであつた。

「あゝ藤田君か、暫く御無沙汰しました……。ハアそうですか其れは結

構ですな。是非とも御伺ひ致しませう、ハイさよなら」
故意と切口上で恁麼ことを送話器に吹き込んで済ました顔付で自分の机に歸つて來るのであつた。そうして會つた晩には屹度數江が心配そうに尋ねる。

「なあマアさん、未だ誰れも感づきはれしまへんか。」

「芝居が上手やよつて知れへんく。」

「妾かつて知れん様にと思ふて一生懸命に江戸ツ子使ふて懸けまんねんせ、モシく大阪市役所ですか、私は藤田と申す者ですが御面倒ですが工務係の増田サンを一寸電話室へ願ひます。云ふてな、えらい江戸ツ子使ひまんねんせ、マアさん居やはりまつか、ちう様な事云ふたらぢき色街の者や云ふ事分りまつしやろ、そやよつてゑらい江戸ツ子使

ひまんねん、ほいたらな男衆はんが妾の後に立つてゑらい笑ひよりまんねんせ、妾も可笑しうて堪りまへなんだけどなあ笑ふたらイカンと思ふて辛抱してましてんせ、本統に苦しかつたわ。」

「ほんになあ戀はせつない物ぢやのう。」

「ホ、誰れの強色だんねん、それ」

「河内家やが、今度は新派で伊井蓉峰を聞かせたろか。ハアそうですか其れは結構ですな是非共御伺ひ致します。」

「貴方も眞面目そうな顔をして、よた助だんなあ。」

「そやけど芝居してると面白いなあ、役所の連中は誰れも俺があれから數江はんに會うてる事知りよれへんせ、今日もなあ此の間連つて來た奴等がなあ謝りよんねん、あんたみたいない人をゑらい悪い處へ引つ張

つて行つて本統に濟みまへなんだゆうてな。阿呆な奴等や、餘つ程俺を買ひ被つとおるんやせ、聖人見たいに思ふてけつかんねん。』
勇之介は痛快そうに自分の醜行爲を讚美した。

五

お由はとうと血を吐いて死んだ。

嗟峨や御室の紅葉が京時雨に冴へる頃、その紅葉の色より赤い血を吐いて心静かに眼を閉ぢた勇之介は愛しい妻の亡骸を東山の麓の菩提寺に葬つていと懇ろに供養を營んだ。人無き機会を窺つては冷たい墓標に身を抛げかけて數江との交情を亡き妻の靈に懺悔して身の放埒を佗びてゐた。深い悲歎の淵に沈んで亡き妻の追憶に情を浸して居る程に勇之介の

頭にはまた數江の幻が浮び初めた。

勇之介には怎うしてもお由と數江とが同じ者の様に思はれてならなかつた。お由を想ふと厭やでも應でも數江の事が聯想された。そして數江に會つてる間丈けお由の事を忘れて居られたのだ。戀は盲目である。勇之介の心には數江に會ふと云ふ事はお由に對する供養の様な氣が湧き初めた。するともう居ても立つても居られなくなつて來た。

勇之介は前より一層激しく槌家へ入り浸る様になつた。數江の方でも奥さんが逝つたと云ふので一層實意を盡す様になつた。二人の戀は相互感應に依つて際限も無く高まつて行つた。勇之介も随分無理な工面をしては逢瀬を楽しんだが數江も出来る丈けの算段をしてはみあげをしたのであつた。

花柳界には怖ろしい寄生虫がある。數江のその商賣氣を離れた逆上せ方を何で彼等が見のがして置く物だろうか。數江はそうした毒蛇の壓迫に依つて心にも無い無心を勇之介にしなければならぬ羽目に陥つた。

「數江はん貴女何ぞ心配事が有るんや無いか、大變顔の色が悪いせ。」

勇之介にそう聞かれて數江は尙氣後れがして了つた。

「いゝえ何にも」

「あんたが無理をしてる事も知つてるねん、ほんまに甲斐性の無い男やけどなあ、俺も男やがな、心配事が有つたら相談だけしてえな。」

勇之介は濕ほいのある眼で窺つと數江の惱ましげな顔を心配そうにのぞき込んだ。數江はその優しい勇之介の心根を見せられるにつけて尙更その胸の裡を打ち明けて頼む事が出来なくなつた。そして腸をちぎられ

る様な悲しさに勇之介の膝へワツと泣き崩れて了つたのである。

「どうしたんやねん一體、話ぐらいして呉れてもえゝやないか。」

「妾ほんまに、ほんまに、苦界云ふ事が分りました。」

數江はきれぐに恚う答へてあとは又おいくと泣くばかりだつた。

數江は勇之介の境遇をよく知つてゐたのだ。

六

大正橋の設計者として名高き増田工學士は難波新地の娼妓數江に通ひ詰め、首も廻らぬ借金で數江より春着をねだられても工面つかず近頃大弱り。

赤新聞の花柳だより欄に恚う云ふ記事を見出した時、勇之介は總身に

冷水を浴びせられた様な心持がした。彼れの顔は見る／＼眞つ蒼に變つて新聞を擴げて居る手がぶる／＼と打ち顫つて止め度が無かつた。鐵の棒でいもなぐられた様に頭がグワーンとして身體が地の底へ滅り込んで行く様な心持がした。

『あゝッ。』

グツタリと疊の上へ身を抛げ出して勇之介はたゞ溜息をついて居た。

「えらい事に成つてもた。そやつたな、俺は大正橋の設計者なんや、それで世間の奴は少しは俺の名前を知つてよつてんな。そして數江は娼妓や、世間の奴は數江が俺の奴房のお由に似てる云ふ事も、あんな上品な別嬪な女や云ふ事も何にも知らんで、唯娼妓や云ふ事丈けを想像しよるねん。工學士が娼妓に惚氣る。そう聞いたら俺れにしたかて馬

鹿にするな。噫俺はもう世間へ顔向けが出来んように成つてもたなあ一體どうしたらえゝんやろ。死んで仕舞ほうか。俺のあの世間へ出て初めての仕事の太正橋は今また俺の最後の作になつて了うたか。處女作が直ぐに遺物になる。俺の生涯は丁度美しい初恋の匂に酔ひ乍ら死ぬ情死者の様な物やなあ、おゝそう云や俺は未だ戀の甘さを知つて、辛さを味はない身や、そやけど俺の戀はほんまに苦しい戀やつた。甘うて狂はしいアブサントの酒みたいな戀やつたなあ、そうやお由も死んだんや、俺も死んでももう心残りはない。金の工面は盡きるわ、新聞ではえらい耻を曝らされたしもう生きてゝも面白うない。——うんそうや、最う一遍數江に會ふて、それとなしに御別れをして來たろう。』

勇之介はやつと甦へつた様に、だる相な身體を起して帯をしめ直した。

七

「まあマアさん、好う御越し。」

仲居の大袈裟な挨拶に勇之介は妙に氣が臆して了つた。この家は一現茶屋、勇之介は何日もキチン／＼と歸りがけに金を拂つて行くのだから勤め先も名前も明かす必要は無かつた。その心安さを付け目に何日も此家と極めてゐた勇之介は此頃では悉皆知りお名染になつて了つた仲居に對しても未だ勤め先や姓名を明かした覺へは無かつた。「なあ、あんた名札おこなはれたな。」とねだられると勇之介は何日も「マアサンでえ、やないか」と答へて居たのであつた。數江にも固く口止めをしてある。名刺を

せがまれる處を見ても喋つては居ない様だ。して見ると假令仲居がアノ新聞を見たとしても勇之介の事だと知れよう筈が無かつたのだ。けども脛に傷持つ勇之介の身には何だか氣が咎めて仲居と顔を合すのもバツが悪かつた。何日もは聲を掛けて上つて行く茶の間へも顔をそむけてス／＼と二階へ押し上つて行つた。

數江はいつになく早速やつて來た。襟のかゝつた着物を着て頭髪を櫛卷にしてゐた。加減が悪いと云ひ立て、札を下げて屋形で休んで居たのだが、「槌屋からだすが怎ないしやはります。」と男衆が氣を利かして云つて行つたので「そんなら一寸挨拶丈けして來まつさ。」と言つてその儘の姿で飛んで來たのであつた。

「マアさん。」

數江は一言憊う言つたさきで勇之介の膝へ突つ伏して泣出してしまった。勇之介もまた堪らない悲しさが胸にこみ上げて来てそのまた背へ取り付いて涙を流した。

「數江はん。」

「マアさん。」

二人はお互ひに何か言ひ度い事が胸につかへて居る様だが涙にせかれ口には出ない。

「なあ數江はん、今日俺はなあ一目あんたの顔を見に来てん。よおう顔を見せていな。」

勇之介はヤツトの事で切れぐに之れ丈けの事を言つた。

「マアさん、そんなら貴方も死にはるつもりだすのか。」

數江は涙の顔を擧げて驚いた様に勇之介に問ひ返した。だがその返答は要らなかつた。もう二人の間に言葉は要らない。互に涙を透して見詰めた顔と顔とは又涙の雨に隔てられて了つた。二人の心の波動は一つになつて二つの身體をグル／＼と驅けめぐつて居るばかり。

八

道後温泉のふなや旅館の離れ座敷で美しい情死の華が咲いた。

男は勇之介で女は數江であつたのだ。數江が死出の晴衣裳はお由の遺愛の振袖であつたと云ふ。

勇之介は大正橋の設計者であつたと云ふところからこの心中を新聞紙には大正橋心中と云ふ標題で書き立て、世間へ傳へられた。

多情多恨の増田勇之介の生涯は儂なかつたがその社會への貢獻はあの
大正橋の鋼鐵のトラツスが朽ちない限り長く後の世までも残つてゐる。
そして數江と遺す戀の浮名は木津川の水が涸れない限りいつ迄もく流
れて行く。

へらんめい物語

「おい一寸待てよ今俵が来るから。」

「俵なんてケチな物は要ないよ、俺はテクシーだ。」

「生意氣な事を言つて電車の乗換は分つてるんかい。」

「分らなくつてよ、へらんめい。人を田舎漢だと思つてあがらあ、へん

江戸ッ子だい。」

久田はゑらい權幕で『びん一』を飛び出しました。

「おい〜一寸待て、ちやあ停留場まで送つて行つてやるから。」

花村が靴を出させて後を追つ驅けて出て見た時には最久久田は姿を暗
に匿してゐました。

「セウが無い奴だなあ、一人で歸れるんかしら。」

花村が立ち止まつて氣を揉んで居ると、外の連中もドヤ〜と出て參
りました。

「なあに聞いて行きやあ分るさ、彼奴だつて口を持つてるんだもん、ま
さか迷兒になる氣遣もあるまい。」

皆んなは憊う言つて平野町の方へ歩み運びました。久田は昨日初め
て大阪へやつて來たのでした。そして今夜學校友達に歡迎會を催して貰

つて久方振りの級友の盃に悉皆り酔つぱらつて了つたのでした。

『一體どう行きやあ電車道へ出るんだらう、何だか變な街だなあ。』
久田は恚う呟いて靴の紐を引き摺り乍ら無暗に歩いて居ました。

『何處かで聞かうか、江戸ツ子が江戸の街を聞くのも業腹だなあ。』
そんな瘖我慢を張つて出鱈目に歩いてゐると前へ行く空俵を見付け出
しました。

『オイ俵屋ッ。』

久田は俵を呼びとめて矢庭にそれへ乗つてしまいました。俵夫は膝掛
を丁寧に掛けて梶棒を上げて尋ねました。

『何處へお供しまんねん。』

『赤坂檜町 だい。』

『へえ、赤坂檜町 言ふたら何處だす。』

俵夫は怪訝な顔をして久田に問ひかへしました。

『乃木坂の下だよ。』

『へえ』

俵夫は益々分らなくなつて來ました。久田は自烈たくなつて梶棒を握
つた儘呆乎突つ立つてゐる俵夫に吐鳴りつけたのです。

『手前えは東京にゐて乃木坂を知らねえのか。』

俵夫は驚いて悲鳴を上げました。

『東京ッ、え、旦那無茶言ひなはつたら困りまんがな、此處大阪だつ
せ。』

『何ッ、大阪だ。何だつて大阪なんかへ伴れて來あがつたんだい、飛ん

でもねえ事をしあがつたなあ。』

今度は久田が魂消へたのです。そして俣夫に喰つてかゝつたのです。

「道理でヘンテコレンだと思つて居た。大阪なんかへ引つ張つて来たつてセウが無えちやあ無いか、東京へ引いて行つてくんねえ。』

「何言わはりまんねんな、貴方今乗りなはつたんだつせ、其麼無茶言ひなはるんやつたら交番所へ行きまつさ。』

「何ッ、交番だ。巡查なんかに話が分るもんかい、行くんなら警視廳へ行かうや、おい警視廳へ引いて行きな。』

「うえ、失敗た事したなあ本統に、貴方降りとくなはれ、頼みまつさ。』

「お前に頼まれなくつたつて俺の方から御願ひして降りらあね、こんな

俣、うつかり乗つて居ようもんなら、此の先どこ迄持つて行かれるか先が知れやあしねえや、まご／＼してるとブルガリヤ迄引つばつて行かれて獨逸の鐵砲彈丸で粉微塵にされちまうせ、ア南無阿彌陀佛々々々々々々々。』



久田が或る日矢つ張り酔つばらつて氷屋へ飛び込んだ。だけど彼れは甘い液のかゝつた物は大嫌い。

「おい小父さん、ブツカキを呉んないか。』

「ポツカケやつたら貴方うどん屋へ行かな有れえしまへんせ、氷屋へ來なはつたかてあさまへんがな。』

「フウーン大阪つてヘンな處だね。」

氷屋を飛び出した久田今度は教へられた儘うどん屋へ飛び込んで、

おいブツカキを呉れないか。」

やがて饅頭屋の小僧廣蓋へ載せて来たのは、うどんのかけ、郷に入つては郷に従がへと觀念して、セウ事なしに酔ひ醒めのうどんに咽喉を濕ほして歸つて来て、其の話をすると大阪ではうどん屋のかけがポツカケで氷屋のブツカキがカチワリと言ふのだとの事。それを聞いてから久田は悉皆大阪通に成り済ましまして、又氷屋へ飛び込んで、

「おいカチコワシを呉れッ。」

○

大阪は懸け値を言ふのが商人の常、何でもねぎつて買はぬは馬鹿と聞いた久田は何を買ふにも屹度ねぎつて見るが何處でも何一つ久田がねぎつたんでは負けて呉れませんでした。その事を話をしますと花村は教へました。

「そりやあ君江戸辨でねざるから駄目なのさ、大阪の商人は他國者は皆んな毛唐扱かいにして貪るのを當然として居るんだよ、だから言葉が異つては一向利目が無いんだ。大阪辨でやらなくつちやあ駄目さ。」

それから久田は一生懸命で大阪言葉の練習を初めました。そして曾我廼家の下廻り位には成れる程の自信を得ましたので早速實地應用に取りかゝりました。唐物屋の店先に立つて、

「おい、この靴下なんぼや。」

「そらあ一寸高うおまつせ、四十五錢だす。」

高い、馬鹿にしあがるない、と吐鳴り付けかけてその言葉をグツト胸へ呑み込んで、勉めて調子を生温くして言ひました。

「四十五錢ツ、ほんまに高いな、最うチツト負かりまへんか。」

「掛値はおまへんねんけど、なそんならまあ四十四錢にお負けしまつさ。」

「何だ、四十四錢、たつた一錢の御負けかい、べらんめい、一錢や三錢位は此方から負けてやらあ、おい来た、剩錢は要らねえせ。」

五十錢銀貨をボンと抛り出して久田はその靴下を引つさらつてスタスタと逃げる様に歸つて参りました。そしてヤツト氣が付いた様に立ち止まつて、

「大阪の商人は矢張り利口だなア。」

○

何しろ大阪は御交際の派手な土地柄、久田も直ぐにクレジットの利く御茶屋が出来てしまいました。そして孤獨の淋しさと好きなお酒の誘ひの儘に時々は單騎遠征を試みる様になりました。一人で出掛けて藝者の三人も招んで騒いでゐる、十一時も廻つて半近くなると仲居がきまつて「ヒーサン、もう仲迎へだつせ、どないしまへう。藝妓はんかへしまへうか。」

「なあに關はないよ。そしてお銚子を……」
次に仲居は隣りの御座敷へ行つて隣りのお客に同じ言葉を繰り返へす

と、

「あアさよか、そんなら二圓三十五錢儉約していにまつさ。」

「ほんまに明花云ふたら阿呆らしいもんだんなあ、中迎でいにはるのが

一番經濟でおまつせ。」

藝妓はどんぐ箱を片付けて、

「おゝきに、ねえちやんおゝきに、さいなら、ねえちやんさいなら。」

○

(久田は東京の友達にこんな手紙を送りました。)

大阪は獨身者のもてない處にて候、女房持ちは長續きがするとの事に
て候、そして氣前のいゝお客よりもケチくする奴の方が歡迎致され候

矢張り其方が長續きがするからとの事に候、この間芝居を奢つてやろう
としたら、そんな無駄な事せんでもよろしいがな、そんな事するより細
う長う來とくなはれと云はれ申候、その時大に癢に障り自動車迄命じて
芝居へ繰り込み申候、ひしが、アトにてつくづく後悔仕り候、大阪の
ヤツは悟りを開いて居り候、小生はとうと其後二ヶ月ミジメな態でクス
ポリ申しつくづく、妓の言葉を肝に銘じ申し候。

○

久田は妓に持てる爲めにとうと結婚いたしました。妻君は矢張り江戸
ツ子でした。初めて家を持って早速に瓦斯會社に瓦斯を引かせました。
燈用の方は悉皆り引き終つて炊事の方のを引く段取りになりました。

「アノ七輪も取り付けて行つて欲しいんですがね。」
若い細君は職工にそう申しました。

『七輪だつたか。』

職工は恚う奥さんの言葉を繰り返して解せない面持でした。そして恚う勧め出しました。

「カンテキにしなはつたら恚うだす。七輪は今えゝのが會社におまへんねん。」

「カンテキだつて、そんな物は家政の講義でも聽かなかつたから、私には使用出来ないわ、悪くつても七輪にしとくれよ。」

「そうだつたか、七輪だすなあ、會社に有つても大阪の七輪はあきまへんせ、カンテキにしときなはれな、カンテキの方が使いようおまつせ。」

蔭でこの問答を聞いて居た久田さん、可笑しいやら馬鹿々々しいやらとうとう堪りかねて吐鳴りつけました。

「馬鹿ッ、七輪もカンテキも同じだ。東京の七輪が大阪でカンテキなのさ。」

小さき岡半の群れ

「どや、又皆なで松島ぞめけるへんか。」

「しようむ無い、張店が無うなつたんで松島もてんとあかんわ。」

「寫真見て歩くのも亦面白もんやせ、初めに寫真見せて後で實物が出て來よるねんさかい、此の頃の女郎屋はつゝまり連鎖に成りよつてんなあ。」

「活動の連鎖はえ、げど、女郎の連鎖はやくたいやせ。」

五人が十六圓宛出し合つて、二三日前に定期を百石買ったのが、とんく拍子で上つて行つて、今日利喰ひの金が二十八圓宛懐に返つて來たので、皆んな嬉しくつて堪らない。今朝から退けが待遠しくつて、只もうそわそわして居た。

今も支配人の眼を盗んで、倉の隅つこへ集まつて恁麼相談を初めて居る。

『三十圓がとこ阿彌陀籤引いて散財せうやないか、一遍。』

明星商業出の冬木君が奇麗に分けた頭髪を撫で乍ら發議した。

「冬木君見たいな藝人はその方が好るやろけど、俺等歌が唄へんさかいに散財はとんとおもしろくないわ、矢つ張り華を去り實に就いて欲しい

なあ。

抗議を持出したのは大阪高商出の櫻井君だつた。

「鼠捕る猫は爪を匿しはつたな、櫻井君之れで仲々隅へ置けんねんせ。

學校の英語會のおりにはオフエリアになりはつてんさかいな。」

「ハムレットが散財のたしに成りまつかないな、都々逸のばつたりの機りに墓堀りの唄も出されまへんやろかい。」

「一事が萬事云ふ事がおまつさかいな、オフエリアに成りはる程の役者はんやおまへんかいななあ、冬木君。」

櫻井君と秋月君との間に小競り合ひが始まつた。

「えらい名優や、おほけ有り難う。」

櫻井君は苦笑した。冬木君は形勢宜しと見て取つて早速阿彌陀籤の製

造に取りかゝつた。

『上は十圓で、裾は三圓にするせ。』

『十圓は一寸應へるなあ。』

『何ぢやい、成金やないかい。』

厚ぼつたい壁の小さな窓から鐵格子と金網とを透して忍び込んで来る光線は、悉皆り衰へて、土藏の裡には早くも宵が迫つて来た。

『あの茶瓶老爺奴、ど根性の悪いがきや、今日に限つて故意と愚圖々々してけつかるねんものな。』

『ほんまにいな、六時半になつてもたせ。』

五人の小岡半は上役の歸りを待ち佗びて、オーバコートに手を通し乍ら、毒口を利き合つて、會社を飛び出した。

『高津行や、あれに乗ろう。』

曲線路を廻ろうとする電車の方向札を眼ざとくも讀んだ秋月は、そう吐鳴つて一散に驅け出した。

『よつしや。』

あとの四人も續いてその電車へ、前から、後から、飛び乗つた。

『失敗た、夕刊買はなんだな。』

『信濃橋へ行つたら買へるがな。』

『信濃橋へ行く迄お預けだつたか、あんたは乗換の手數の爲めには商賣も犠牲にしはりまんねんな。』

『たうも無い事云ひないな、商賣やて、割前で二十石持つても商賣かいな。』

「二十石かて梅檀の二葉だつせ。」

電車の釣革にぶら下がつて、五人は傍若無人に大聲で話し合つた。

信濃橋へ來ると夕刊を引つ奪くる様に見取つて、彼等は満員電車の裡でソフトの鍰を重ね合して、相場欄に眼を曝した。

「止めは幾何や。」

「七十五錢やぞ、又八文儲かつたせ。」

「おや六節には八十七錢迄行つたんやなあ。」

「まだまあ強氣や、後氣配が七十八九錢やもんなあ。」

「怎うしても二十六圓臺になるなあ。」

「どんく／＼買ひ煽るねんなあ。岡半其處のけやぞ。」

電車は東横堀に沿つて走つて、それから新川を東に曲つた。

千日前の灯がバツと明るく運轉手の前に輝いた。

彼等は戎橋で降りて、狭い賑やかな通りをスタ／＼と縫つて、丸萬の前に出た。上り口の廣い土間には、下足札を戴いた下駄と靴とがギツシリと並んでゐる。

彼等もその上り框で靴の紐を解いた。そしてダ、ツ廣い二階を通り抜けて明るい三階へ出た。然し其處も幾列かの食卓の兩側に、悉皆り人が充まつてゐた。

だが物馴れた仲居の幹旋で直ぐに一つの食卓を占める事が出来た。裕の様な布團を敷いて、焼け焦げだらけのチャブ臺に對つて、待つ間程なく、落しの火がつぎ足され、いびつの鐵鍋がかけられ、そして煮汁に浸した白い魚肉が運ばれた。

盃は大概かけてゐる。だが酒は律氣な徳利に溢れ相になつてゐる。鍋はでこぼこだが魚は鯛も鯉もどつちも新らしい。

此家の勝手に馴れた彼等は仲賣を呼んで、きずしや酢蠣の小鉢を取つて、鍋の煮へる迄の肴にした。

缺け盃を取り交はし乍ら、彼等はまた堂島の噂をしたり、之れから自分等の前に展開して來ようとする歡樂の家の憧憬に酔つたりした。

○

敵は本能寺に有るので、淡白と丸萬を出た彼等は、さも酔ひしれた様な足取りで、肩を組み合つて、一現茶屋の巷をうろつき廻つた。

「此の頃は一現も、強氣に成りよつて呼びよれへんなあ。」

「あいさに呼びよる家は穢ないしなあ。」

「一體に此處の家は皆な奇麗にしよつたなあ、此の景氣で儲けよつてんなあ。」

其廢事を囁き合ひ乍ら、彼等は物欲し相に御茶屋を一軒一軒、覗いては歩いてゐた。

「呼びよらんかて、一現やつたら關へんがな、何る丈け大けな家へ登つたらやないか。」

「里の家へ行こか、彼家、あれで一現や相やなあ。」

「何やしらん、ちつとも酔はんなあ、今日、どや、最う一遍正辨丹午でキユーツと引つかけて、その元氣で繰り込もやないか。」

『さうせう〜』

彼等は又法善寺裏の關東煮屋の暖簾へ首を突込んだ。

○

法善寺横町を出ると、今度は直ぐ様、突き當りの家へ飛び込んで仕舞つた。宛然猪の様に、五人は一團になつて脇目もふらずに玄關へ飛び上つて仕舞つた。

その權幕に驚いて、仲居は『おこしやす。』とも何とも云はずに、只彼等の前に呆乎突つ立つてゐた。

『上つてもえ、ねんやろう。』

『へい、おこしい、何卒お二階へ。』

冬木君に念を押されてやつと氣が付いた様に仲居は彼等を二階に案内

をした。そして八端の座布團を勧め、桐丸の火鉢を運んでから冬木君に聞いた。

『藝妓はんだつか、娼妓はんだつか。』

『散財や。』

冬木君は大風な態度で答へた。

『さうだつか、誰れ々々呼びまへう。此の頃の事だつさかいに、お馴染はん聘らしても出来るや出来んや分りまへんけど……。』
仲居は如才なく伏線を引く。

『誰れでもえ、わ、面白うて、好う働く妓を頼みます。』

『そんならお任せしとくなはるか、七八人でよお、まんなあ。』

『だんない、早よしてや。』

仲居はばたくと階下へ降りて行つた。

『え、家やなあ仲々、何ちう家やつてん。』

櫻井は床の間や違い棚を見廻し乍ら冬木君に聞く。

『何ちう家やつたしらん、名前も何も見んで飛んで這入つて仕舞うたがな、誰れぞ知らんか。』

『さあ俺も氣が付かなんだなあ。』

『梅、何んたら云ふねんせ、俺、上の一字丈け讀んで下の字見よ思うたら、最う家の裡へ這入つてるねんがな。』

『ハツハツハ、そんでも月岡君は一番落ち付いてるわ、信濃橋迄夕刊の辛抱しやはるお方丈けあつてなあ。』

仲居が不精箱を提げて上つて來た。續いておちよぼがお銚子と突き出

しとを持つて來た。

『え、鹽梅に若手の別嬪さんばつかり揃ひましたせ、最う一寸遅うなつたら難儀しまんねんせ、此の頃はもう八時半になつたら箱切れたつさ

かいな。』

盃を皆んなの前に配り乍ら仲居は手柄相に斷つた。

『ゑらい景氣やねんなあ、しかしその割りにこゝは静かやおまへんか。』
鹿島君が一寸皮肉のつもりで半疊を入れた。

『こゝは此の方の御客さんが多うおまんねん。』
仲居は腕で枕の格好をして見せた。

『今晚は、おほけに。』

所謂若手の別嬪さんが、早くも天降つた。

「姐ちゃん、おほけに。」

藝妓は仲居の傍へ座つて御禮を云つた。

「えらい早うおましたなあ。」

「わて、菊廼家から歸つて来たところまでしてん、ほしたら姐ちゃんところから掛つて来ましてんやろ、ちき飛んで来てんわ。」

「あんた飛びなはつたん。」

「まあ、姐ちゃん、嫌やわ。」

藝妓は皆んなの方へ向き直つて、錫の御銚子を取り上げた。

「君龍はん、彼處へ行きいせ。」

仲居は冬木君と鹿島君との間を頤で示した。

「ごめんやす。」

君龍は裾を引きこつてそこへ行つた。

「おいでやす、まあ一ついさまへう。」

「おほけに、早速だんなあ。」

君龍は冬木君から貰つた盃を下に置いて、一座を眺め渡した。

「皆んなえ、色してはりまんなあ、何處のお歸りだす。」

「當て、見い。」

月岡君が恚う反問した。

「牡蠣船だつしやろう。」

「そんなしみつたれた處へ行くける、未來の岡半ちやい。」

「そんならはり半だつか。」

「ちやうく、菱富ちやい。」

は、り半、菱富は共に南地一流の料理屋、彼等が今日飯を喰つた丸萬とは月と鼈との相違である。

襖が開いて、又妓の姿が現れた。

「成る程別嬪はんが澤山揃ひはつたな。」

鹿島君は盃を口へ當てた儘、その仇つばい姿に見惚れた。すると直ぐ君龍が横鎗を入れた。

「どつちやも、え、女だつしやろう、有つても無うてもなあ。」

箱が持ち込まれる、お銚子のお代りが来る。續いてドヤ／＼と裾を捌いた女が繰り込んで来る。一座は悉皆り陽氣になつた。

「何ぞ御聞かせ——。」

仇つばい妓が棹を繼いで調子を合せ出した。

「勝千代はん、思ひざしだつせ。」

冬木はその箱に貼つてあつた。墨馬勝千代と云ふ名を讀んで、その發見を誇り度さに、撥を持つ手に盃をつき出した。

「へい、おほけに、思ひ出しだつしやろ。」

勝千代は受けた盃を一寸嘗めて、疊へ置いて、直ぐ又三味線を取り直した。

「何いきまへう、妾の知つて相な物を一つどうぞ。」

「そつちで唄ふとくなはれ、聞きに來ましてんさかいな。」

「藝妓は弾くもん、お客はんは唄ふもんだんがな。」

「あ、さよか、そんなら鳩ぼつぼ唄ひまつさ。」

「よたやんやわ、あんた。皆さんどうだす。」

勝千代は冬木との問答を見切つて、外の連中に水を向けた。然し口ではそう尋ね乍らも手では夕ぐれを弾き出してゐた。すると早速月岡が歌ひ出した。冬木も中途からついて唄つた。

「ばつたりだつせ。」

「よつしや奴さん頼みまつせ。」

鹿島は活潑にお鉢を引き受けた。

「俺あかんせ、あんた助けてや。」

櫻井は君龍に後見を頼んで磯ぶしを唄つた。糸に乗る乗らないは別として、兎に角皆んな藝人だつた。南地の賑ひを一組で背負つて立つてる様な景氣で、大陽氣、大浮かれになつて來た。

不圖したはずみで、越後獅子の替へ唄が幾つも幾つも出だした。

「北濱の午前九時、一寸株がはいる、チイカがカチ〜、小僧が走る

……。

唄ひかけて花奴は冬木に尋ねた。

「チイカ云ふたら何だんねん。」

「株式でなあ寄り付きのをりの合圖やねん。」

「鐘紡、鐘新、商船、郵船、當所株ウー、血眼になりて、五やり三か

ひ九かひドタヤリ。

「なあ、ちよいと、五ヤリ三カイ、ドタヤリ云ふたら何だんねん。」

花奴は又聞いた。

「皆んな場の符牒やねん、そいで、早う唄ひ。」

「寄り添ふお客は如何と、片唾のむ、上り下りに、青うなつたり赤く

なる。

『本統やなあ。』

櫻井君が思はず感謝詞を發した。

「損したお客は、家へ歸りて鬱ぎ込む、儲けたお客は供つれて、御座れ参りませう、北陽に新町、南地に堀江、藝妓自動車に乗せて飛び廻る、遊び遊びで、おもしろーや。

『自動車で一廻りせうか。』

冬木は馬鹿に亢奮して了つた。

『北濱午前九時。それから何ちうねん。』

鹿島は手帳を出して文句を控へ出した。

『男と生れたからには株をやらんと、あかんなあ、米は未だ事が小いな

あ。』

無口な萩野迄が氣焰を上げた。

『二十石の相場師ぢやあ、ねつから始まらんなあ。』

月岡は恚う云ほうとして、藝妓達の手前に氣が付いて、言葉を唇で喰ひ留めて了つた。

花奴が何の氣も無しに唄つた歌の一節が、五人の心に色んな風に働いたのであつた。

お化けの晩

いつもは、一本つけて頂戴な、と頼んでから出るお銚子が今夜に限つて初めつからチャンとお膳の右の端に載つて居ました。私は何の氣も無

しに、その鷹取焼のお銚子を取り上げて、コク〜と嬉しい音をさせて
山吹色の液體を盃へつぎました。

そして最う世の中の雑念を追つ拂つて了つて、のんびりした心持にな
つて、樂しみの盃を唇へ運びました。所が怎うでせう。其れはお茶だ
つたのです。

だけども小母さんのいたづらにも大分馴れつこに成つて來た私は、直
ぐに恁麼事ぐらゐで驚く物かい、と云つた反感を湧起させて、一向平氣
な顔付でグイツとそれを飲み乾しました。そして重ねて盃に其お茶をつ
ぎました。

『おかんは怎うだす。』

小母さんは面白そうに肥つた頬つべたに笑の波を打たせて、長火鉢の

向ふから私に尋ねました。

『いや、上加減——だけど酒が變りましたね。今度の酒は大變癖が無く
つて結構ですね。』

『ハ、ハ、匂が無うて、味が無うてだつしやろう。』

お膳を並べて御飯を喰べて居た慶ちゃんには直ぐに落話家の言ひ草を思
ひ出して、手を打つて笑ひ轉げました。

『之らああかん、あつちやこつちやあかされてる様な物やがな。』

小母さんも感念をして今度は本統のお酒を片口から錫の**かん瓶**に移し
て其れを銅壺につけました。私は面白半分にも徳利のお茶を盃に注い
でも見ましたが、最う傍から笑つても呉れず飲んで見た所でつまらない
から其儘膝に手を措いて神妙におかんの出來るのを待ちました。

不圖うしろを見ると階段脇に、華美なのを濫いのと、女持の手携袋が二つ並んで居ました。

「おや、お客さんが有つたんですね。」

「さいせんからだんがな。」

「へえ、ちつとも知りませんでしたよ、馬鹿に静かちやありませんか」

「若旦那はんだんねん。」

「あゝ道理で……」

私はさう點頭いて再び手携袋に眼を移しました。そうして這入つてる藝妓の名を思ひ出さうとしましたが、確かに見覺へのある手携袋なんでは有りますが、怎うしても誰れんだつたか見當が付きませんでした。

ふんと嬉しい匂が鼻をかすめました。見るとおかんが出来て芳ばしい

酒が錫のかん瓶から鷹取焼の徳利に移されてる處でした。

私が咽喉を鳴らして待ち兼ねて居た盃を呑み乾しますと小母さんが直ぐ尋ねました。

「お加減は怎うです。」

「結構ですね。」

「何時でも結構だんねんなあ。」

「いつでも悪い物ちや有りませんかからね。」

「知らん、もう、あんた見たいなよた助はほんまに有れへん。」

小母さんが一寸御冠を曲げて口をつむぐと今度は慶ちやんが話しかけました。此の家の人達はいつも私が盃を手に執るのを待つて色んな話を持ち出すのです。私は身體に酒が這入ると少しは雄辯になつて駄洒落

の一つも申しませんが、酒が這入つて居ない時と來ては何か聞かれても返事もしないからなのです。

「なあ兄さん、枕外し上げまへうか。」

「枕外しつて怎麼もなんんです、お酒の下物になる物だつたら貰ひませう。」

「何でもよろしいさかいに、お呉なはれ、云ひなはれな。」

「ぢやあお呉なはれ。」

二人の會話を長火鉢の奥から面白さうに眺めてた小母さんは、又口を出した。

「あかんく、枕外しあげまへうか、云ふと直きやないとあけへんがな。」

「そんなら最うあかんのん、ううー。」

慶ちやんは小母さんに聞き返して、べそをかき初めました。

「枕外しつて何なんです、一體。」

私は手酌の徳利を置いて小母さんに訪ねました。

「寢て、枕を外す人がおまつしやろ、そんな人はなあ、年越しの晩に誰れにでも宜しいさかいに、枕外し上げまへうか、云ひまんねん、そして向ふの人が、へいお呉なはれ、云ふたら最う枕を外さん様になりまんねん、そいで呆乎して、お呉なはれ云ふて了うた人は、それから枕を外す様になりまんねんといな。」

「へえーあ、今日年越ですな。」

表がガラリと開いて幸どんの聲が湧いた。

「へい秀千代はん送りましたせ。」

聲と一緒に躍り上つて来た秀千代は「お母あちゃん、おほけ難有う。」と挨拶をするや否や其處へ笑ひ轉げて了ひました。

「何やねん、この妓。」

怪訝な顔をして其の容子を凝視めた小母さんは直ぐに其の理由を見出して同じ様に笑ひ出しました。

「お、本統に可愛らしい事、一寸顔も一緒に見せていな。」

畳に突つ伏して笑ひに咽んで居る秀千代の抛げ出された頭には緋鹿の子の手柄を掛けた前勝山がいたいけなく笑ひの音律と一緒に顛へてゐました。

「可愛らしいおまつしやろう、さいせん最つと可愛らしいおましてんせ

女將ちやん、花櫛やらびら、の簪やら仰山さしてなあ、そりやあ奇

麗だしてんせ。」

秀千代はやつとの事で、恚う云つて顔を上げました。

「何で取つて来てんな。」

「それでも女將ちやん、餘りけつたいだつさかいな。」

「けつたいにするさかいにお化けやないか。」

「まあ行つて来まつさ、三階だつか。」

秀千代は前勝山を振り立て、御庭敷へと梯子段を上つて行きました。

夕餉の箸を置いた私は、お化けの姿が見て歩き度く成りましたので外套を引掛けてブラリと表へ飛び出しました。

北の新地を一廻り、それから足は南地に向ひました。宗衛門町から戎

橋筋へ出ますと街が賑やかに成ると一緒に、人の粧ひもけばけばしく眼を惹き出しました。其處では種々雑多のお化けを見ました。

腰の曲つたお婆さんが鼠の尻尾の様な白髪を稚兒鬘に結つて、赤い振袖を着て踊り歩いてたり、十二三の娘さんがちよん鬘の鬘を被つて顔に鬘を描いて大手を振つて歩いたりして居まして、宛然御大典の騒ぎをぶりつ返して居る様でした。

其麼姿を追ひ廻して、賑やかな通りを行つたり來たりして居ますと足はいつしか中筋へ曲りました。私の心は京末の二階へ飛んだのでした。古風な腰障子をガラリと開けて這入つて、火鉢の前へ座つた私は直ぐに頼みました。

『今夜はお化け見物にやつて來たんだからね、成る丈け人間離れのした

處を、一つ陳列して下さいな。』

『なんせ今日は紋日だつさかいな、それに今は丁度何處も一とぎに成つてまつさかいに、お氣に入つた妓さん出來るや怎や分れしまへんせ。』お梅さんは私にさう斷つて置いて電話口に向つたのでした。

二階へ通つて、突出しのこのわたを洒に浸して啜り乍ら、待つ間程無く襖がスウィツと開きました。

『今晚は、おほけに。』

見ると大一の丸鬘が閨際でお辭儀をして居るのです。頭を上げたら其れは清羽さんでした。自分から刎ね馬の清羽と稱してゐるお轉婆藝妓が今夜は莫迦に尤もらしく見へました。

『なんだ、悉皆り見違へちやつたせ。だけど大變よく似合ふよ。之れか

ら丸鬻ばつかりにおしよ。』

『すうさん、殺生な事云ふとくなはんな、妾幾歳や思ふてなはんねん。』

『十三、七ツか。まあ一杯いこう。』

すると又賑やかな足音が梯子段を上つて参りまして私の座敷の襖を開けました。

『今晚は——』

今度は島田でした。どんなお婆さんかと思つて上げた顔を見ると勝丸なんです。

『勝ちちゃん、今夜はお年越しだよ。』

『へえ、そうだつせ、そやよつて鶴の羽根の簪さしてまんがな。』

前のお座敷でも咎められたと見へて感じが早い。見るとイ菱の紋のつ

いた白い羽が島田の鬻に差してありました。

『それが御年越しの御祝儀なの、馬鹿に安値なんだね。』

『前には年越しの日には皆んな、役者の紋のついた鶴の羽の簪さしまし

てんせ。』

私が又、勝丸に申しますと清羽が恚う云ふ説明をして呉れました。

『妾等、丸鬻に結ふてもあさまへんといな、家の姐ちやんが、妾見たい

なおたやんが丸鬻結ふたら、お化けで無うて、本統のお婆はんに見え

る云ひはつたさかい結へしまへんなんでん。』

『酷え事を云ひあがるなあ、俺よりも口が悪いね、清糸さんがか。』

『いんえ、店の姐ちやんだんねん。』

勝丸は姉妹共太棹なんです。姉の清糸さんは太棹には稀れた美貌を持

つてゐるんですが、その實の妹の勝丸さんは氣の毒な事には薄菊石が
あどけない顔を曇らして居るのです。若いのに似合はずよく働く妓で
早速に大きな箱を引き寄せてゴムの布れを膝へ當てがふのでした。す
ると清羽は直ぐ止め立てしました。』

『三味線出したかて、すうさん唄ひはれへんしい。』

『淨瑠璃やと一寸語りはるねんわ、なあすうさん。』

勝丸は恚う答へて、私の同意を求めたのでした。

『妾、すうさんの御座敷へは三味線弾きにけるへんねん。御馳走よばれ
に来るねん。』

清羽はさう云つて又蜜柑を剥き出しました。

『なあ姐ちゃん、そやけどすうさんの御馳走はうつかり出来まへんしい

妾こないだ鹽梅一杯かまされてんわ。』

勝丸は三味線を置いて、清羽の方へ向き直りました。

『何だい、わの一件か、はつはつは。』

私も思はず哄笑しました。

『なあ姐ちゃん、此の間御返事呉れはつたさかいに來ましてん、そした
らな、春菊さん姐ちゃんや皆で鶏肉煮て喰べてはつてんわ、そいで妾
なあ、之らあえ、處へ來た思ふて、早速、お、け御馳走はん云ふて喰
べましてん、大けな肉を擇つてなあ。そしたら姐ちゃん、すか見たい
だんねん、柔うおまんねん。』

勝丸はむきになつて清羽に云ひ付けるのでした。

『そらあ鶏肉の膏だしてんやろ。』

「ちがいまんねん、姐ちゃん。付き出しのおかきだんねんがな。」

「おかき」清羽は眼は丸くして勝丸に問ひ返しました。「よかつたなあ、さう云やあな、妾も一遍すうさんにかまされたし。」

「姐ちゃん何でだまされはりましたん。」

勝丸は又、熱心な態度で尋ね出しました。

「妾も矢つ張り遅うに這入つて來ましてん、そしたらすうさんな海鼠の酔の物で飲んではずつてん、このわたしも出てましてん、そいでな妾に親子井御馳走したる云ひはんねん。妾喜んで待つて、んわ、そしたらな此家の姐ちゃん白御飯持つて來やはつてんわ、親子井云ふたあるのに、けつたいな事しやはる思ひ乍ら黙つて見てましてん。」

「ふん。」

「そしたらすうさんがな、白御飯の上へ海鼠とこのわたしを載せて、さ

あ親子井や云ふて呉れはんねんわ。」

「それが何で親子井だんねん。」

勝丸は妙な顔をして清羽の答へを待ちました。

「このわたしは海鼠の子やさかい海鼠とこのわたしと御飯に載せたら矢つ張り親子井やおまへんかいな。」

「まあ、無茶やな。本統にすうさん悪戯やは。」

「あらあ俺の智恵ぢやあ無かつたんだよ、御梅どんの入れ智恵だつたんだよ。」

「嘘、嘘、何云ひなはんねん、近所に居る者はるらい災難や。」

私はその罪を仲居さんに塗り付け様としたばつかりに、とうとう四面に

楚歌を受けて仕舞ひました。

「なる姐ちやん、戌亥云ふたら何方だんねん。」

勝丸は突然お梅さんに尋ねました。

「彼方だす。」

お梅さんは梯子段の方を指しました。

「今晚なあ、戌亥の方を向いてなあ、御壽計を切らんと一本喰へたら願

事が叶ひまんねんといふ、笑ふたらいけまへんねんせ。」

勝丸はそんな話を持ち出しました。

「そいつは面白い、海苔卷の丸つ嚙りだね、お梅さん濟みませんが一つ

お鮓をさう云つて下さいな、一番大きな奴をね。」

私はさう頼みました。そして願ひ事で思ひ付いて、二人に尋ねました。

「枕外しは賣つたかい、どつちも外し相だね。」

「へえ、妾、賣りに行くの、面倒臭いさかいに電話で賣つてもたわ。」

清羽の云ひ草は何日も奇抜です。

「電話で、電話でどないして賣りまんねん。」

「電話で無茶苦茶の番號呼びましてん、そしたらな、もしく云ふて出

やりましたん、妾ないきなり、枕外し賣りまつせ、云ふたら先でな

ハイく云ふてはんねん。それで賣りましたせさよなら、云ふて切つ

てもてんわ。」

「そら好え考へだんな、妾歸つたら早速やつたろ。」

勝丸は悉皆り感心して仕舞ひました。

御壽司が参りました。太く逞しい海苔卷が五六本、錦手の大きな皿に

並んでます。

「ほお。」

清羽はその一本を手に取つて歎聲を發しました。そして戌亥の方に向つて、勝丸と二人並んで頬張り初めました。私とお梅さんとは踊りでも見る様に、その容子を眺めてました。暫くは只、蠶が桑を喰む様な、さゝやかな音丈けが御座敷に御座いました。

海苔巻きはごつちも半分程になりました。忽ち勝丸は海苔巻を抛り出して、両手で口を抑へて、ハツ／＼と笑ひ出しました。すると清羽も吊り込まれて笑ひ出しました。

「何だ、笑つちやあ駄目ぢやあ無いか。」

「そんなでも、ハツハ、丸齧の……奥さんが、大けな御壽司の丸つかじり

……

勝丸はお腹を抱へて笑ひ轉げて仕舞ひました。

「あんたが笑ひやつたさかいに、妾も笑ふてもたわ、願ひ事めちやめちや。」

「あんたが丸齧結ふてなはるさかいだんが、頭見る迄可笑しい事おまへなんでんせ、頭見て口見たら、あんた、ハツ／＼ハ。」

清羽が勝丸を恨むと、勝丸も清羽を恨んだのでした。

「丸齧がそんなに珍らしいのか。」

「そんなでも藝妓が丸齧結ふたら面白うおまんがな、そいで上品な奥さんになつて御壽司嚙つてはんねんもの。」

お梅さんが御饅子を持つて上つて来て、窃つと會ひ狀紙を勝丸に渡し

ました。

「だいせうおまへん。」

勝丸が斯う申しましたけど私が勧めました。

「行つといで、私も最う歸るんだから。」

「そんなら勝手さして貰ひいで。」

お梅さんも傍から口を添へました。

「さうだつか、たうと三味線弾かずに喰べ逃げでえらい勝手だんなあ。」

勝丸は氣の毒相な格好で棹を箱に仕舞ひにかゝりました。

「すうさんの御座敷は其れで好えねん、お客はんやあれへん友達や。」

清羽も斯う云ふのでしたが、勝丸は未だ立ちにく相でした。

「何やしらん、氣が残るは。」

「しやれた事を云ふない、あ、そるか、こいつだね、氣が残るんなら持

つてお行きよ。」

私は勝丸の喰べかけの海苔巻を箱の裡へ抛り込みました。

「おほけ有り難う。之れでもう、思ひ置く事更に無し、や。」

勝丸は其れをいゝ機會にして、淨瑠璃でさげをつけて歸つて行きまし
た。

ぜんざい十一杯

會社で此の頃「せんざい十一杯」と云ふ新熟語が出来た。

其の言葉の起りを説明する前に「はりま屋」と云ふ家の商賣を話して

置かねばならない。

堂島仲町の電車通りの東側に小さな店構の洋菓子屋がある。パンだのドロップスだのを入れた硝子の飾瓶の間から奥を隙して見ると、古めかしいルイ式の食器棚の上にウキスキーやベルモットの瓶を雑然と並べてその前に置ストローグを圍んで小さな椅子が五六脚無難作に置てある。店の脇には別に狭い入口があつて其處に、コーヒー、せんざい、と云ふ看板がぶら下つてゐる。而して又別に吊行燈が下つて居て其れには「川魚すき焼御料理」と云ふ文字が墨の跡あざやかに記されてゐる。二階を見上げると大阪風の陰氣な格子窓が壁に切り明けられて、それに掛つて居る俥の幌の様な日覆にはキリンビヤホールと赤い布で縫ひ付けてあつて嘗てはさう云ふ商賣も營んで居たと云ふ事を物語つて居る。

會社で「あみだ」等をするとなぐ其處へ電話を掛けて菓子や珈琲を取

り寄せた。そんな事からつい皆んなは會社への往復にその「りま屋」の店に注意をする様になつた。すると忽ちその家の商賣に就て不審が皆んなの頭の裡に湧き起つて來た。海魚すき焼と云ふ看板は上つて居るが何日見ても其處に人の上つて居る氣配のした事が無かつた。椅子を並べたカフェーの方も始終ガンガラガンだ。只時々店先に立つて菓子を買つて居る人達丈けが其家のお客さんらしい様子なのである。

「あのはりまやちう家の二階は怎ない成つてゐるねんやろう。」

「すき焼の行燈が出てゐる處を見ると、飲める様に成つてゐるんやろかい。」

あみだのシュークリームを摘み乍ら斯麼話が出た。

「ねっから人の這入つてゐるのを見掛けんなあ、仲居でも居よるんかい。」

「居りまつせ一人、一寸別嬪やけど愛嬌の無い奴ぢや。」

藤田君は得々として下田サンの疑問に答へた。

『ふうーん仲居が居よるのかい、そんなら早速今晚行つて見よやないか皆んなどや。』

獨身者の多い會社なので未だ月給の温かみがポケットにある裡は退けてからの後の行動を色んな風に目録まれるのであつた。活動寫眞の好いフキルムが來てると云ふと直ぐ其れへ總見する。何處のビヤホールに好い女給仕がゐると聞くと直ぐ其處へ大舉して押し寄せると云つた風で、其の會社の連中は随分呑氣な眞似ばかりして日を送つて居るのであつたそれで野次馬の隊長の進藤君が斯う發議をすると皆んなは言下に賛成して了つた。

餘り喰ふなよ、酒が不味うなるぞ。』

下戸で大喰ひの下田さんは抜目なく皆んなの食量に制限の注意をして自分の領分の擴大に勉めた。

酒に對して勇敢な、若い會社員の一群れはその夕方はいまやの店先へどや／＼と押し寄せた。

皆んなは靴を脱いで二階へ押し上ろうとすると、今迄不意の大勢の客に面喰つてゐた女將さんが慌て、同勢を押し止めた。

『二階は一寸休んでまんねん、えらい濟みまへんが奥へお通りやしとくれやす。』

酒が這入る前なので一同は案外柔順に方向變換をして食器棚の前の椅子に腰を下した。

『君、今日は酒を飲まう思ふてやつて來たんやがなあ。』

「えらいお氣の毒さんだす。あないにして看板は出しておまつけどな、ねつからお客はんが来て呉れはれしまへんので、此頃はもう仕入れを休んでまんねん、洋酒やしたらいけまへんか。」
藤田君が一寸別嬪やけど、云ふ仲居が、腫れぼつたい様な眼に皺を寄せて辨明に勉めた。

「せうが無い、そんならウキスキーの總揚げをせう。」

「そのウキスキーもねつからお客はんが来て呉れはれしまへんので、氣が抜けてまんのと異やうか。」

藤田君が横鎗を入れる。

「滅相な、そないな事あれしまへん、昨夜口開けしたとこだんねん。」
流石に仲居は仲々如才が無い。そして最う小さなグラスを皆んなの前

へ並べて、四角い壘を手に執つた。

琥珀色の芳醇な液體は皆んなの腸に火の様に燃えた。小さなグラスが數しげく赤い唇に運ばれる時、下田君は一人ムシャクとかき餅や鯛煎餅ばかりを頬張つてゐた。

「あんさん、お酒あがりはれしまへんのだつか。」

「うん俺甘黨やねん、せんざい出来るか。」

下田さんはせんざいと書いた壁間のピラを眺めて問ひ返した。

「せつかくでつけど、せんざいも一寸休んでまんねん、珈琲やつたら怎うだす。」

「何でも折角やねんなあ、一體此處の家何屋やねん。」

「まあパン屋だんなあ。」

「あゝパン屋か、パン屋ならなあ、パン持つて来てんか。」

下田サンは飲み助連をそつち除けにして、寄席へ出る掛け合ひ噺の様な口調で、仲居を取つつかまへて管を巻き初めた。もう大分かき餅が廻つたと見えて嬉し相である。

「バン、怎麼パン持つて来まへう。」

仲居は面白さうに下田サンの顔色を伺つた。

「大けるのんが好えなあ、アノ喰パン持つて来てんか。」

「喰パンだつか。あのバター付けまへうか、ジャムにしまへうか。」

「其麼洒落たもん付けいでだんない、一斤や二斤は面倒臭いよつてなあ長う續いた儘持つて来てや。」

「へえー貴方象だつか、豚だつか。」

「此奴、わやにしあがんない、天下の成金ぢやい。」

下田サンが仲居を獨占して燥やいでる裡に、皆んなは恣に酒を分割して併吞して了つた。進藤君なんかはへいれけである。

「くどけばなびく……チツ、ンや、へツ、斯うなると三味線が慾しいなあ。」

「切り上げまへうか、パン屋に長座は無用や。」

「人はパンのみにて生くる者に非ずやからな、キリストはんも云やはつた。」

最初の當ては外れたが割合愉快になつて一同は表へ出た。

「俺今日一寸用が有るさかひに失敬するせ。」

外へ出ると進藤君はいきなり斯う斷わつてスタ／＼と停留場の方へ一

人で急いで行つた。

「あんた其麼に酔ふて、何處へ行けまんねん、私と一緒に行つたげまへう。」

何にもよく氣の付く藤田君が手をつないで行こうとした。

「だんないく、なまじ色には伴れは邪魔云ふてなあ、」そこオーはなあ

「せえ」や。」

進藤君は其手を突放して南行の電車に飛び乗つて了つた。

翌日、何日も飲に行つた次の朝の習ひとして、皆んなは少し遅れて出勤した。只進藤君ばかりは何日もより早く出て来て頻りにお茶ばかりがブ〜呑んでゐた。

「おや、お早うおまんなあ進藤さん。之りやあ今日天氣が變るは、いつも遅い進藤さんが、今日に限つて早いとは不思議やなあ。」
藤田君は來るといきなり進藤君の顔をじろ〜打ち眺めた。

「扱ては……やな。藤田君、君昨夜あんばい蔭かれたんやが。」

井川君も脇から口を添へたので、藤田君は昨夜の復讐と云ふ意氣込みで勢ひ鋭く進藤君につめ寄つた。

「昨夜はえらい氣が利きまへんで悪うおましたなあ、其代り今日は氣を利かせまつさ、お飯未だ〜つしやる、何ぞ云ひまへうなあ、何云ひまへう、淡泊した物がよろしいな、お疲れの事だつさかいに。」

「君の云ふ事、何やちつとも分らん。俺お飯はちやんと喰ふて來たせ。」
「あさよか、そらあ偉い悪うおましたな。桃ちやんと差し向かひで、ぶ

いづけをな。』

朝少し早く来ると其前の晩の事を妙に想像して冷笑するのが此の會社の風習なのである。又朝歸りを其儘會社へ来て、そしらぬ顔で机の上へ頬杖をついて居眠りをしてゐる者が時々あるのだから是非も無い次第だ。

晝も過ぎて三時頃、丁度あみだの刻限になると進藤君攻撃の火の手は又高まつて来た。

「怎ないしても奢らんといけまへんせ。なあ昨夜云ひなはつた事覚えてはりまつしやろうな。なまじ色には伴れは邪魔やて、あないに當てられて黙つては居られまへんせ。』

「何、そんな事を云ふたんか、そらあ只で済みまへんせ。』

野次馬がまた大勢出て来て焚きつけるので進藤君も放々の體。

「致方が無い。そんならはりま屋のせんざい奢るわ、外の物はいかんせ何ぼ云ふたかて俺そんな因縁が有れへんねんさかいな。』

「はりま屋のせんざい。進藤さんもするいせ。』

「なあに關めへんがな、電話かけいな、錢さへ出せば出来るんやろから無理にでも拵へさすねん。』

輿論は仲々手酷しい、藤田君は勇躍して電話口へ掛寄つた。

「何人だす、十一人だつか十一杯だんなあ。』
ふり返つて頭數を讀んで見てから受話器を外した。

「あゝ、モシ／＼はりま屋さんだつか、アお汁粉出来まつか、えゝ、十一杯、出来ますなあ、そんなら直き持つて来て下さい。』

「何や、拵へるて、こらあ話が違うて來てぞ。」

進藤君は忌々し相に念を押した。

「はりま屋の奴十一杯と聞いて拵へる氣に成りよつてんせ、十一杯やと五十五錢やからなあ、之れから材料を買うて拵へても引合ふさかいなあ。」

下田さんは其う解釋を下して、仕事をやめてソワ〜としてお汁粉の來るのを待ち侘びた。

之れが判例となつて「お惚氣を云つた者はお汁粉十一杯の罰金に處す」と云ふ法律が此の會社に布かれ出した。

それから此の法律は辛辣な行政官の解釋に依て日毎に良民を苦しめ出した。

翌日早速此の法網に罹つたのは井川君であつた。

折しも表の通りに喇叭の音が湧いて兵隊が通る氣配がした。

それを聞きつけで逸早やく便所の窓際へ飛んで行つたのが井川君だつた。續いて三四人、ペンや算盤を持つた儘で其處へ駆けつけて兵隊の行列を眺めてゐた。一人が不圖隣りの事務所の窓を見ると其處に女の電話交換手が同じ様に首を突出して通りを眺めてゐた。

事實はそれだけであつた。

それを辛辣な検事が巧みに告訴文を作つて犯罪を構成させて了つたのであつた。

「僕ら何の氣なしに兵隊見に行つて悪かつたなあ、勘忍してや。」

「そら悪いな、眼と眼とで折角話をしてゐる處を邪魔したらそら悪いわ

「そんでもまあ今夜の逢ひ曳の相談は纏まりましたか。」
「皆んなは井川君を取り圍んで攻撃を初めた。」

「あほらしい。」

井川君は未だ外を眺めてた。

「いのを〜、俺等事務室へ歸にまつさかい、まあ御ゆつくり〜せんざいはようおまんなあ、云ふときまつせ。」

又其の翌日になつた。河村君の下宿して居る家は細かい金が堪つて困る間賣だつた。會社では又細かい金に不自由をする時の方が多いのでよく兩換にやつて来た。その時はいつも娘が使ひに来るので皆んな大騒ぎをやつて其娘に兩換娘と云ふ名稱迄も奉つて岡焼をしてゐた。皆んなは

せんざい法令を擁して眼を光らしてゐる矢先に、巧くその兩換娘が飛び込んで来たんだから堪らない。娘の姿が應接室を出るか出ないに早速河村君をオツ取り巻いて、

「おい、せんざい〜。」

その翌日も何か事件にしようとして仕事をそつち退けて心を八方に配つてゐると晝少し過ぎ、怎うでも物にしななければならぬ時分になつた。そこへ電話器を消毒する女が来て、来たとき云ふ印の認めを貰ふのに一寸暇どれて暫く立つて待つて居た。すると下田さんは眼鏡越しにヂツと下から消毒婦の餘りみつともよく無い顔を見上げて椅子を勧めた。

「まあおかけ。」

「おほけに。」

消毒屋の女は下田さんに會釋をして大きな尻を其椅子に下した。皆んなはニヤ／＼と下田さんの顔を見て薄氣味の悪い笑を洩した。

「何、笑うてんねん。」

「せんざい、せんざい。」

「斯麼ことでせんざいに成るのか、ちつと無茶やなあ。」

「下田さんは斯麼事でも因縁をつけな、せんざいの種が出来へんがな。」
とうと帽子掛にかけてあつた上着のポケットから五十五錢強奪して仕舞つた。下田さん口惜し相に指を折つて見て。

「まあおかけ、一字五錢五厘やがな、高い惚氣賃やなあ。」

西久保君が襟の廣く明いた、馬鹿にダブ／＼したシャツを着て來た日があつた。

「あなたのシャツは變つてまんなあ、涼し相だんなあ。」

來て上着を脱ぐ早速井川君がそのシャツに眼をつけて斯う尋ねた。

「え、之れは和服に着るシャツだんねん。」

西久保君は斯う答へた。皆んなは其會話に牽かされて期せずしてそのシャツに眼を注いだ。

「をやッ、そりやあ女のシャツやせ、襟がくつてあつて、乳の處が悠然してるや無いか。」

佐原さんが鋭敏にこう突込んだ。

「脇が開けてある處が、怪しいせ、男のシャツにそんな處の明てる物は

有れへんがな。』

進藤君も直ぐ尻馬に乗つて騒ぎ立つた。

『せんざい／＼もう何と云ふてもあかんわ。』

皆んな異口同音に斯うわめいた。

『女のシャツとは無茶云ひよんな、そらあ難題と云ふ物やせ。』

『そんな云ひ譯お廢しなさい、や、今朝寢惚眼で間違つて着て来てんせ
匂嗅ひで見い、お白粉臭いわ。』

西久保君、金を抛り出して、

『降参々々、早う謝まつて仕舞はんと何云ひ出されるや知れえへん。一
遍見當をつけたらのがしよれへん、蛇見たいな奴が揃うとおる。』

やがて又飲みに行く機會が出来た。

行きつけの江戸安と云ふ肉屋でお芳と言ふ仲居が番で出た。後姿が馬
鹿に別嬪相で前へ廻ると落膽する女なので、皆んなは直ぐに裏シヤンと
命名して了つた。

『ウラシヤン言ふたら何ちう事だたんねん。』

皆んなの話の節を其仲居は聞き答めた。

『裏シヤン言ふたらなあ、獨逸語で別嬪さんいふ事やねん。』

井川君は早速斯う答へた。皆んなクス／＼笑ひ出した。

『あんた佐原はん言ふ名だつか、妾好やわ、佐原はん言ふ苗字、え、名
だんなあ。』

裏シヤンは頓着なく佐原さんの傍へ寄つて行つた。

『よお〜色男、せいざい〜。』

『名丈けが好きなんやろう、え〜』佐原さんは裏美人に斯う聞いて皆んなの方へふり向いて『好きな人と同なじ名や言ふねんが、ゑらい味の素や、煮汁に使はれて其上奢らされて堪るもんやない。』

『そらあ一座の手前やが、まあ何んせ御馳走はん。』

翌日の午後、時計が三時を鳴つて刑期が来た。河村君が。

『佐原はん、お金は。』

『そんな阿呆らしい事が有るかいな。僕はそれ程お目出度屋や有れへんね、知らんせ。』

それでもとうと厭や應なし、金をふんだくつてからの言ひ草がい。

『裏シャン仲々え、女や、實が有るなあ。』

お汁粉十一杯の適用は益々手酷しくなつて行つたが各人の自重警戒も益々堅くなつて行つたので二三日は不漁が続いた。そして會社が大變忙がしくなつて来たので工場の方の人が夜手傳いにやつて来た。一寸御汁粉に渴へた悪人ばらが爪牙を研いて眼を光らしてゐる矢先に、工場から手傳ひに来てる篠田君の處へ電話が掛つて来た。

電話口に出た井川君、肥後さんの御取次ですよと言ふ前置なんかには頓着なく、よき鳥御座んなれと言つた歡びで。

『篠田さん電話だつせ、仲々別嬪さんだんなあ、好え聲や、聲聞いた丈けでもゾク〜してした。ぢらさんと早う行つてやりなはれ。』

『なあに、肥後君だんが、僕今夜一寸勝手させて貰ひまつさ。』

受話器を掛けて戻つて来た篠田さんは頻りに言ひ譯をする。

「關えしまへん、其儘にしときなはれ、跡で片付けまつさかい。その代りせんざいは分つてまつしやろうな。」

下田さんは机の上を片付けてゐる篠田さんにさう言つた。

「そんなら何卒よろしう願ひまつさ。」

篠田さんは机の上を其儘にしていそくと出て行くと、其跡で井川君は早速はりまやへ電話を掛ける。

「他所から來てる人をさう厚かましく強請るのはいかんせ。」

佐原さんがせんざいの注文を押し止めようとする、下田さんは折角の功名を水の泡にされては堪らないと言つた權幕で。

「本人の口から、よろしう願ひますと言ふてつたんやさかい關えしまへんがな。」

「それがな。」

「そらあ机の上を片付ける事だつしやろう。」

「そんな人のえ、解釋の致方をしてたら商賣に成れえしまへんがな、此の商賣は餘つぽど圖々敷うゆかんとあさまへんよつてなあ。」

踊りの場

私は北の新地でお茶屋をやつてる小母さんの家に居ました。夜は大概一寸赤い顔をして、黒い襟のかゝつたお召の丹前に、角つなぎの浴衣を重ねて、脇息に凭れて情話物なんかを讀んで暮らして居ました。

そんな格好はかたぎの家庭に育つた人達には不思議なんかも知れません。私の友達は皆んな一種の好奇心を抱いて私を訪問して呉れるのでし

た。隣りや三階の御座敷に湧く絃歌を他所に聞き乍ら友達と話をしてみ
すと、時々、

「居やはりまつか。」と言つて襖を細目にあけて、友達の姿に驚いた様に
締め立て、トンくと階段を下りて行く藝妓なんかありました。そ
んな事に出會わすと大抵の友達に實に奇天烈な表情をして私の顔色を伺
ひます。そして私を餘程の艶福家の様に想像して、何のかの乙に搦ん
だ事を言ひ始めるのです。

「怎う致しまして、私は藝妓に關係をつけようなんて、そんな贅澤の出
来る身分ぢやあ御座いませんものね。高の知れた腰辨の分際ぢやあ有
りませんか。」

「私が眞面目臭つて斯う申しますと、友達らは尙更あやしみの念を強く

するのです。

「そやかて金ばかりが女を拵へる手やあれへんもんなあ、斯麼に居た
らあなた、寶の山に住でる様な物だつしやろう。」
私はうるさく成ると直ぐ痰阿を切つたのです。

「へん、大阪の女は皆んな御伶俐様だよ、鼻つぱりばかりのスツカラカ
ンに惚れて見ようなんてえ、そんな茶人は鐘太鼓で探したつても有り
やあしないよ。」

實際私は女には奇麗でした。そして何時もスツカラカンでした。私は
懐に金が這入ると、只だらし無く飲んで了ふ男なのです。

「貴方は女にでも凝りはつたら未だ始末がえ、ねん、女道樂は身を飾る
言ふてな着物は残るやろけど、酒道樂はしまいに禪迄飲んで了ひ

まつせ、ほんまにお金かねが勿體もつたいないしい。」

小母をばさんも私の酒さけには愛想あいそをつかして了しまつて、斯麼意見こんないけんの致方しかたをする様やうになりました。

「怎どううも有り難がたたう御座ございます。ですがねお金かねつてえ物は使つかふ様やうに出で來きてるのでさあ、天下てんかの廻まり持もちつてねえ。」

すると、私わたしはこんな悪にくまれ口ぐちを利きいて又また盃さかづきを重かさねるのでした。そんな時ときには私わたしはもう飲のませないと表おもてへ飛とび出だして梯子はしごをして廻まる物ものですから小母をばさんは私わたしの言いふが儘まに後あとをつけて盛もり潰つぶして了しまうのでした。私わたしは殆ほとんど年中吞ねんぢうのんだくれて居ゐる癖くせに家うちで一人ひとりで飲のむ酒さけには意外いぐわいに弱虫よわむしで、お銚子てうしを二本空ほんあけると最もう酔よひ潰つぶれて寢ね込んで仕舞しまうのです。

そして私わたしは人ひとから言いはれるとつい意地いぢを張はつて捨すて鉢はちな事ことを言いつて威か

張はつて仕舞しまうけど、心こころの裡なかでは絶たゑず自分じぶんのだらしない酒癖さけぐせに愛想あいそをつかして、何なんとか救濟きうさいの途みちは無ない物ものかと色々いろくに思案しあんをして見みて居ゐるのでした。

だが私わたしは又また、酒さけの難有ありがたみ味あじも知しつて居ゐました。運動不足うんどうふそくで不節制ふせつせいで絶たゑず埃ごみを吸すつて暮くしてゐる私わたし、しかも生うまれた時ときから極きめて肉付にくづきの貧弱ひんじやくな、見みるからに病身びやうしんらしい私わたしが案外あんぐわい壯健さうけんで病氣びやうきと言いふ物ものの味あじを餘あまり知しらないのはいつに酒さけの効果かうくわだと信しんじて居ゐるのでした。夜更よふかしが常習性じやうしゆせいとなつて居ゐるが案外あんぐわい、朝早起あさいっおきなものも酒さけが齎もたらして呉くれる時間じかんの睡眠節約すいみんせつやくだと感かんじて居ゐるのです。

それで私わたしは決けつして酒さけを廢やそうとは思おもひません。だけでも怎どううかして友とも達たちとの張合はりあひづくで虚榮みえに飲のむ酒さけの分量ぶんりやうは制せいし度たい物ものだと、何日いっもつくづ

く考へて居ました。

そしてとうと終ひに斯麼事を考へ付きました。もう友達と飯を喰ひに行く様な事が有つても酒は一本切りと極めよう。そして家へ友達がやつて来て飯時になつたら「幕の内」に御酒一本宛と言ふ事に極めようと。そして其の實行を小母さんに頼みました。

「初めの一遍か二遍は出来まつけどな、それが續いたら偉いもんや。」

「大丈夫ですよ、私は本統はお酒が好きつてえ程ちやあ無いんですものね、それを馬鹿ですから伊達に煽つて居たんでさあ、二本から先はうまい事も何とも無いんですもの、最う本統に呑む物ですか、ツマリませんもの。」

『好う言ひなはつた、その口を忘れんときなはれや。』

小母さんは斯う言つて皮肉な笑を私に浴びせたのでした。

その翌晩早速に藤田と井川とがやつて参りました。どつちも私の悪友で呑み友達です。やがて電氣が灯いて御飯時に成りました。御約束の通りに、胡麻をふつたお結飯に、お煮しめ、それにお銚子を三本つけた廣蓋を、お秋どんが運んで参りました。

「おい、そう一遍に出さんとポツ／＼にせうや、折角のおかんが冷めてしまふがな。」

藤田君は不思議さうな顔で注意をしました。

「一人に一本宛おしきせなんだよ。ポツ／＼にして居ちやあキリが無いから俺は斯う言ふ風に憲法を作つたのさ、最う之れつきりだよ。」

「るらい殊勝になつてんなあ、君がそんな發心をする様に成つたら、之

らあ最う世も終りやなあ。」

井川も傍から口を入れました。

「俺あ此の頃では酒つてえ奴が、つくづく怖ろしく成り出したね、何とかして深酒丈けは慎む工風をしなくつちやあ、屹度こいつで身體をしくじるね。」

「おい、今一寸丈け廢めて、んか、折角の御馳走が却つて不味うなるがな、何やこう耶蘇のお寺へ行ってよばれてる様な氣がするがな。」

その癖さう不味い酒でも無さ相な顔付で藤田君は頻りに盃を乾して居ました。それから三人は何だか物足りな相な格好で握り飯をつまみ出しました。

それから又寝つ轉がつて煙草の煙に包まれて話を致してゐました。

「誰れぞ聘んで貰ほうやないか。」

井川君が不意に斯う言ひました。

「家で騒ぐ譯にも行きやあしないや。」

「何に騒がんかて好えがな、浪花踊の話でもせうやないか。」

「俺が奢るわ、一遍位は散財もせな家へ悪いさかいな。」

「チツト御最負に。だけど其の義理立は俺の居ない日に頼むせ、兎に角俺はもう前に盃が並ぶ様な事は眞ツ平だよ。今迄の文夫さんとはお人が異うんだからね。」

話が無くなつて、何かと二人が水を向け出すのを、私はニべも無く勿ね付けて居ました。だけでも何だか、只話をして居るのは淋しう御座いました。

「寄席へでも行つて見ようか、久し振りで。」

それでとうと斯麼提議を持ち出してしましました。

「樂屋のねえはんのペン／＼で辛抱するか。」

「文夫ほどの侍がなあ。」

二人は斯麼皮肉を言つて立ち上りました。

「ほうら妾の言ふた通りや、な、よう續きました、タツタ一日丈けな。」

小母さんは得意らしく斯う言つて私を送り出しました。

「なあに寄席へ行くんですよ、もう酒屋の門口だつて通るもんですか。」

「ようこそ、金だらひに新聞紙受けて待つてまつさかいに、安心して酔

つばらうて歸りなはれ。」

三人はぶら／＼と曾根崎新地のなまめいた街を歩いて行きました。男

衆に箱を携げさせて、忙がし相に小褌を取つて行き交ふ妓の裡には、窈
つと私に挨拶の微笑を投げて行く者も御座いました。大近松が戀情こゝ
を瀬にせり蜷川と言つた。その蜷橋の跡へ來ると小さな酒場が御座いま
す。

「咽喉が乾いたなあ、ソーダオーターでも呑もやないか。」

「そうだねえ。」

私は思はず知らず藤田の誘惑に陥つて酒場の椅子に腰をおろして仕舞
ひました。黒塗の縁の衝立には藤の花の刺繡が箆つてゐました。

「シンコクテールを三つ持つて來てや。」

「あゝ、二つでいゝよ、俺はソーダオーターを呑む。」

藤田の言ひ付けを私は慌わて、押し止めたのでした。

「ソーダは何ぞ入れまつか、レモンかストロベリーか。」
給仕女はふり返つて尋ねました。

「そうねえ、ストロベリーが好いねえ、奇麗で。」

小さな庭を眺めて待つ間程無く、小さな二つのグラスと大きい薄紅色の液体を入れたコップとが、大理石の卓子の上に運ばれました。小さいグラスの液体の裡には梅の種が這入つて居ました。

「こらけしからんな、大ぶん損やせ。」

「この種の容積丈け損やねんなあ、一つの物質の裡へ他の物質を入れる時には第二の物質はその容積丈け第一の物質を排除す、言ふねんやろアルキメデスの原理やがな。」

二人はアルキメデスの原理を持ち出して酒場の主人の所置を憤慨し出

しました。

「アルキメデスカ、はつはつは、偉い物を持ち出したね、俺の方にもアルキメデスが這入つてらあ、恁麼アルキメデスさあ。」

私も面白くなつてソーダオーターの中に突込んであつた麥稈を振り廻しました。

「おい此の梅の實の容積丈けシンをつがせ様やないか。」

「さうだ、俺も此のアルキメデス丈けソーダオーターを補充させるせ。」

「ねえはんく。」

井川は本統に給仕女を呼ばうとしました。

「何だ本統にアルキメデスを辨償させるのかい。」

「なあに御代りやねん、君ももう一杯それをやりいな。」

「廢せ〜俺は失敬するせ。」

御神輿を据ゑられちやあ厄介だと思ひましたので私はツイと表へ飛び出してしまひました。それで二人もせう事なしに續いて出て参りました。

「寄席は何處へ行く。」

「永樂館よ。」

「落語家はせうも無いせ、義太夫にせうやないか。」

「うん其れも好かろう、幡重だね。」

私は又藤田の口車に乗つて了つて素直に新道の停留場の方へ足を運び出しました。

電車は間も無く三人を日本橋へ運びました。流石に南地は空氣が華や

かです。宗右衛門町から道頓堀の光の巷に出て、更に千日前の狭い道に這入ると心が無暗に上つて参ります。幡重の前へ來ると古風な庵看板に勘亭流で太夫の名を書き連ねてあります。そして其前で寫眞がグルグル廻轉して、代るく色んな女の肩衣姿が木戸前に立つ人の眼に映て來ます。そこ迄來ると藤田は立ち停まつて暫らくは語物を打ち眺めて居ましたが、やがて私を省みました。

「未だ早そうやな、淨瑠璃は切三から聞いたら結構や。」

「うん最う少しぶらつかう。」

私も何の氣も無しに斯う答へて又ぶら〜歩き出しました。三人は只當ても無く歩いてる裡にいつしか法善寺の横町を曲つて狭つ苦しい食傷新道を通つて居ました。

「一寸タゴローロいやないか。」

「そやな、最う酔ひも醒めてもたなあ、君、るゝやろう、スヤテケースやないねんせ、新規に蒔き直すんやさかいな。」

二人は兩側から互に誘惑の手を差し延べていや應なしに私を正辨丹午と書いた淺黄の暖簾を潜らせて了ひました。私達は其家をタゴールと呼んで居るのです。又梯子酒の事をステヤケースと云つて居るのです。

「とうと又引つ張り込みあがつた。何と云つたつて俺は呑む物かい、籠棒め。」

私は大いに力味返つて、松茸蒸しぱつかりがつく／＼喰べておました。

「神様にかて御神酒を供へるさかいな、まあ盃丈けは置いとくわ。」

井川君は、そう云つて私の前の盃に酒をつぎました。

「そう胡麻をすらなくつたつて、一本丈けは許してやるよ、本統に情無
い奴だね、まるで餓鬼だね、そんなに迄して酒が呑み度い物かなあ。」
「何とでも云ひなはれ、俺は何處迄も酒と添ひ遂げる心底なんやさかい
な。」

愚圖々々云つてる裡に早くも二本の御銚子は空になりました。

「俺らあ引つ張り込まれた代りに引つ張り出してやるぞ。」

私は直ぐに斯んな捨白を殘してフイと表へ飛び出しました。

「何やせうも無い、こんな小こい御銚子でも矢つ張り一本か。」

「又出て行きよつた。文やんが酔うて、俺達があつちやこつちや引つ張
り廻されてる様なもんやな、素面でも世話の焼ける奴ちや。」

二人は吐き乍ら續いて出て参りました。裏門へ出て又道頓堀の方へ行

こうとしますと。小意氣な造りの狭い店構で三味線の格好をして軒行燈に「三すじ」と書いた小料理屋がありました。

「粹な家やなあ、這入つたらやないか。」

「又一本丈け、な、え、やろ、付き合ふていな。」

二人に又引つ張り込まれました。今度は私はうつかりして遂い、前に供へて有つた盃を空にして了ひました。井川は眼ざとくも其れを見付出して、占たとばかり揚げ足を取りにかゝりました。

「恚ないにして其麼に酒が呑み度いやろかな、まるで餓鬼やなあ。」

「だから情の無い奴だと云ふんだよ、傍で見てる母の氣をちつとは察しろい。」

私は其の皮肉がグツと癢に障つたので怖ろしい權幕でグイ〜呑んで

やりました。

「濡れの先こそ露をも厭へだ。もう斯う成つちやあ止めたつて利かないぞ、破れかぶれの三升樽だい。」

「誰れが止める物ける、今夜は最う踊場迄で行つたらんならん。」

藤田君も喜んで敬意を表したのです。大阪の建築條例では階段は十五段毎に踊り場と云つて廣い段を取らねば成らない規則になつて居ますので、私達はステヤケースをして歩いて十五軒目に達する事を踊り場まで登ると稱して居るのです。

「踊り場どころかい、俺はもう今晚は二階迄上つて仕舞うぞ。」

「ろらいやつちや〜。」

馬鹿に景氣づいて仕舞つて藤田君は四本目の御銚子の爲めに手を打た

うと致しました。

「オット憲法々々、川岸を代へやう。」

今度は戎橋の通り、一現の客が朝歸りに飯を喰ひに這入るめさましと云ふ家、もう私も一かど嬉しく成つて來ました。

「斯う腰掛けの家で、三人がウダ／＼云ふて呑んでると、學校時分にある便所の裏で隠れて煙草を吸うたり、餡ぱん喰ふたりした時と氣持がちつとも變れえへんなあ。」

「そりやな、そりやけど級の奴は皆などうしとおるやろなあ。」

「さあ、皆んな散り／＼ばら／＼で此頃ちやあ一向消息が分らなくなつたなあ。」

「時が人と人との間を隔て、行くのと一緒で、空間も離れてる奴を忘れ

させよるねんなあ。」

「分子運動と一緒だね、友達同志の親しさも距離の自乗に反比例する物なんだろう。」

「今日はよう洗ひ張り屋が繁昌する日やな、お天氣が好るさかいな。」

「おつと最うしまいや、棲み替へ／＼。」

忽ち三人は三本の御銚子を空けて今度は同じ通りの一ト口、御座敷へは通らずにワザと板塲脇のテーブルで、

「なんば一本宛でも十五段はるらいな、どや、もう今度あたり踊り場にせえへんか。」

「そりや／＼建築條例の十五段は、あらあ最大限やさかいな、十五段以下やつたら何處でもえ、譯やなあ。」

「よかろう、第一懐が涼しくなつて来た。」

「そんなら今度は踊り場のステヤケースをやるか。」

「何や踊り場のステヤケースたら。」

「顔の利くお茶屋を片端から一時間宛さわいて廻るねん。」

「賛成々々。」

私は最う真先に立つて宗右衛門町の方へ歩き出したのです。」

「おこしい。」

菊の家の仲居は愛想よく私達を迎へました。

「今夜はな一時間で切り上げるねんさかい、早よしてんか、誰れでもた
んないよつてせき前でなあ、未だ之れから俺等仲々急がしいねん。」

「何んだんねん、此處お茶屋だつせ、まむし屋と異ひまつせ、そんな忙

い事は出雲屋へでも行た時云ふ事だんがな。」

「てやんだい畜生ッ、今日の事はお前達には分りあしないんだよ、ステ

ヤケースなんだよ。」

「そんな物なら家から返させまんがな、俵屋はん頼んだげまつさ。」

「え、何だい、何の事を云つてるんだよ。」

「ステツキ返しに行きなはるんだつしやろ。」

「くだらない洒落を云つてないで早く呼んどくれ、ガチャガチャガチャ
と騒いでサツと引き上げるんだい。」

三人はつき出しの柿を喰ひ乍ら盃を重ねて待つて居ました。

「未だか〜。」

「そんなに急ぎなはつたかて、今時分にチツキに藝妓はんが出来まつか

いな。此頃は藝妓はんの方が御客はんより権幕がゑろおまつせ。」

「わやゝなあ、こないしてる間に一時間経つて了ふがな。」

藤田もブツ／＼こぼし乍ら柿をつまみました。そして種の數を讀んで

「源助々々、こら俺損や、アルキメデスが三つも這入つとおる。」

「ちやあ俺のと取つかへようか、ノーアルキメデスだせ。」

「代へてんか。」

切り方の小さな種の無い切れと取りかへて藤田は喜んで喰べました種がないと切り方が小さくつても容積が大きいと思つてるのでせう、彼れは學者です。

「今晚はおゝきに、姐ちゃんおゝきに。」

やがて妓の姿が現れました。そして私達三人と仲居とに等分に挨拶を

致しました。續いて三人ばかり、座は悉皆り陽氣になつてアルキメデスも分子運動も出なくなりしました。

三人の身體には充分にアルコールが飽和して居ましたので酔は忽ち廻つて、いつになく井川迄が唄つたり踊つたりの大はしやぎです。

「もう一時間経つたやろか。」

不圖氣がついて藤田は仲居に尋ねましたら、

「一時間どころだつかいな、今中むかへが來ましてんがな。」

「ハ、ハ、ハ、矢つ張り踊り場やなあ。」

或る會社の日記

黒井君タイプライターを頼みに行く。そこには若い女事務員が居るの

で岡焼連羨しそろう。

『うまい事やりよるなあ、チキ歸つて來んといかんせ。』

『届けて貰ふのん氣の毒やさかいに、待つて、持つて歸つて來るわ。』

黒井君喜び勇んで出て行く。ところが先方もさるものボーイが取り次

いで女事務員に會はせず黒川君ギャフン。口惜しまざれた松島をぞめい

て僅かに鬱憤を慰めて大廻りをして歸つて來る。

大舉丸萬に押し寄す。池長君の隣りに素的な娘さん天降つて來る。皆

んなその方をデロリ〜、池長君ワザと帽子をその袂の上へ置いて立ち

がけに帽子と一緒に袂を引張つて、

「こらあどうも、ゑらい濟みまへん。」

ペコ〜謝まつてそれで大得意、俺が一番の色事師だらうと云つた顔
付き。それから皆んなを蒔いて宗右衛門町方面へ飛行を試みたのはよか
つたが途中でガソリンタンクが破裂してとある御茶屋の門口へゲロリ
〜。

製糖會社から稻荷祭りの招待が來たので佐原吞助、下田喰ひ助、池長

吐き助三撰手出場。餘興の圓子の落語で、

……女の事はばかり考へてると頭が禿げます……。

池長君帽子のツバをグイと引下ぐ

……その代りに禿さんは女の子に可愛がられます……。下げたツバは元
へと逆戻り。蓋し池長君つい一月ばかり前に突如として頭の横手に一錢

銅貨程の禿げが發生したのである。

井川君に來電頻々、姉さんの病氣でお母さんが來阪するとの事、しかし皆んなは病人の容體なんかは一向氣にしないで、

「妹さんは來ないのか、お母さん丈けなんかそんなら國には妹さん一人きりやねんなあ、大阪へ呼びなはれ、國へ置いとくと物騒やせ。」
とさも親切そう。大阪の方か餘つ程物騒也。

進藤君はりまやでは出來ない積りでおしることを奢ると云ひ出す。電話をかけると今日は拵へますとの返事、セウ事なしの大散財。

井川君昨日帽子を間違へて歸る。今朝其の變つた帽子が池長君ののだと分つて「え、ッ」とばかり顔色忽ち蒼然、早速に醫師へ驅けつけて薬を貰つて來て頭を洗ふ。白い泡が澤山でる薬である。

「氣休めに洗濯石鹼を呉れよつたんやせ。」
と云つてその薬を叩き捨てると傍から、

「おや大分毛が薄うなつたせ、ホラ、丁度池長君と同じ處が禿げかゝつて來た。」

とおどかす。

「えい、ほんまか。」

井川君また捨てた薬を拾つて頭をゴシ〜。

辨當、下田君先登第一に駒亭へチキンライスを注文す。そばやや親子井の出前續々到来するも駒亭仲々来らず、後れ走せに注文した池長君のチキンライス江戸安より来る。下田君ひげ面にえくぼを湛へて早速皿をひつたくつて、今や一口頬張ろうとすると池長君が、

「アット異うくそらあ私のんや。」

と泣き聲、下田君致方なく恨を呑んで皿を池長君に譲る。やがての事に駒亭悠々として極めてお上品なるチキンライスを捧げて来る。餓虎の様な下田君只一ナメにペロリとそれを平げて了つた。

「もう一つ何ぞ注文しまへうか。」

給仕が氣を利かすと、少し耻かしくなつて、

「僕は之れでもチツト多いなあ。」

埋まりきらない腹を叩いて痰阿を切る。

翌る日のお晝、佐原さんパンを喰べ乍ら、

「下田さん一ついこうか。」

下田さん慌て、自分のパンを抑へてタジ〜。

佐原さんはまた

「半分上げませう僕今日胃が悪いから。」

取られるんぢやあ無い貰へるんだと分つて急にニコ〜して、

「へい戴さまへう、僕一片は多いなあ、池長君半分上げよう。」

と云つて端の方をポツチリ惜し相に譲る。

アミダは例に依つて小林君最高で十五錢、黒井君金を集めて買ひ物に行かうとする、と河村君脇から、

「僕が行つて来よう。」

黒井君タイプライター以來信用皆無。

「進藤サン、酢蠣と酒注文しまへうか。」

藤田君は久し振りで本社へ来ていきなり呑み助の進藤君に水を向けた。

「酢蠣ならいくらでも奢るぜ。」

「なんば云ひまへう。」

「酢蠣十人前とお銚子十本云ひ給へな。」

進藤君は馬鹿に氣前のいゝ事を云ふ。

「よろしおまつか云ひまつせ。」藤田君は一寸恚う斷つて電話口に向つた

「モシ、北のね千七百十三番……、ア、あんた蠣伊さんだつか、上の電球會社ですがねえ。」

頻りに注文の品を並べて居たがやがて頓狂な聲を出して聞き返した。

「なに、もう休んでる、そんならそうと早う云はんかい、人に散々喋らしといて後で休んでる云ひあがねん。」

藤田君はブン、怒つてその鋭鋒をこつちへも向けた來た。

「皆んな寄つて擔ぎよつたな、ほんまに悪い奴が揃とおる。一生忘れへんぞ。」

「此方も忘れるもんか、チャント日記につけとくからね。」

下田さん阿治川の工場を見に行くので十時に辨當を喰ふ。『モーターボートで行く』と云ふ譯だつたが其交渉が暇ざれてボカンと待たされて居た。

『どないしたんやろう。俺の事は忘れて了うて重役丈けでモーターボートに載つて行きよつたんや無いかしらん。向ふへ行つてから氣が付いて電車で來て呉れ云ふて電話が掛つて來る様なコツチャツタラわややな。』

頻りに氣を揉んでる裡に二時も過ぎて三時になつた。左も無くても腹の感の鋭敏な人が早晝と來て居るので堪らない。

『神戸のパン屋でもやつて來んかいなあ。』

ちよいと西洋菓子を持つて商賣に來るパン屋の事が早速頭に浮んだ。モーターボートとシユークリームと空想の的は二つになつた。小供の様に喜んだり氣を揉んだり喰ひ度がつたりして居る處へ重役が來て、

『之れから行きませう。』

河村君早速ベランダへ出て河を覗いて、

『自働車やと見へるせ、モーターボートは來てへんわ。』

下田さんが空腹を抱へてテクテクと歩いて行く後姿を見送つてゐる處へパン屋がヌーツと這入つて來て、

『毎度難有う、今日は如何様。』

河村君又しても應接室へ兩換娘を引張り込んでベチャクチャ、會社の

神聖大に穢る須くおしるを以て罪を淨むべし。

愈々強制貯金を実施すると云ふので小林君金を集めて廻はる。皆んなシブ／＼ポツチリ宛出して小林君が遠慮もせず受取つて行く其後姿を恨めし相にジロリ／＼。

河村君にヘンな電話が掛つて来る。河村君君何故か顔を赤くしてプツ、リ切つて了ふ。皆んなおしるこ／＼と云つて大騒ぎ。その實其電話と云ふのは高村君から遊興費のワリマへの催促、そうとも知らずにワイワイ連は、

『いよう色男、今日は許しやしないぞ、奢れ奢れ。』

明日は春の運動會で大津行き、ところが朝から雨が降つたり止んだり佐原さんは、

『なあに明日は天氣だよ見給へ、雲が切れてるもの、通り雨さ。』

成る程一寸晴れるが又直ぐシヨボ／＼。池長君透さず。

『随分通りよるなあ、之らあ此の雨は明日迄通つとおるせ。』

井川君頻りに測候所へ電話をかけるが話し中ばかり、進藤君テル／＼坊主をこさへて廊下の柱へ縛りつける。

宇治の鳳凰堂から平等院それから黄檗山を見物して京都を経て大津に行つて掉尾の勇を振ふ。一齊に橋膳を切り上げた筈が馬場の停車場に集

まつた人数は半分、その連中は大概京都の驛でまた姿をかき消して了ふと、云ふていたらく。天氣は幸ひ直つたが怎うやら濡れた人達ちが大分有つた様子。

皆んな昨日は相應に満足したと見へて時々帳簿に向つて氣味の悪い思ひ出し笑ひを洩らしてゐる。けども一言も其れを云ひ出す者は無い、云ふと直ぐに「おしるこ」と出るからだ。

支配人が電話口で男の友達みたいな口吻でシメ合せて居ると井川君が傍からおしるこおしること囁く。支配人扱ては聞かれたかとハツとしたが最う圖々敷くなつて、

「おい餘り大きな聲をするなよ、何て踊りか、今晚か、ウンよし〜。」

涎を拭き乍ら受話器を掛る、折しもそこへ東洋製麻から運動會のお土産の折詰がといたので、とうとビール半ダースものにする。此時應接室では井川君嬌かしいのとヒソ〜近頃おしるこ屋大繁盛

スミス飛行の日、支配人自分が演らせる様な氣になつて方々の知己を會社へ招待する。

「今夜誰れも残つて居ないのか。」

「池長君が残ります。」

「池長君一人きりか、御客さんが来るからモット残つて居ないといかん

——ホントに皆んな飛行器を見度くはないのかなあ。」

致方なく四人残つて來客を待つ。誰れも見へず待ち呆け。夜間飛行は

大阪中どこからだつて見へたのなもの。

東京倉庫爆発す。その爆音に井川君早速階段へ遁げ出ようとする。佐原さんが椽側の扉を開けて出て見ようとした。井川君慌て、其方へ行つて扉を開けかけて又思ひ返して階段の方から遁げ出ようとする、とつおいつ戸迷ひしてうろつく事多時。

黒井君火事見舞に行けと命せられた。處が黒井君の靴は目下大破損、生憎今日は朝からの大雨で往來は泥の海。黒井大思案の後にやつと大悟徹底す。

「え、俵で乗り廻したれツ。」

以來黒井君雨降りには俵に乗つてゐる人は皆んな靴が破れてる物と断定す。

おしるこのアテが無くなつたので今日は皆んなの墓口から銅貨をのこらず集めて御茶受を買ふ。歸りに井川君夕刊を買ふとしたが銅貨は皆んな晝出しちやつて無い。電車が動きかけてから、

「おい五十錢で釣銭を呉れ。」

大きく出て夕刊賣の婆さんから夕刊一枚ちよろまかす。

「お父さん妾もつれてつて。」

すがり付くお嬢さんをふり切つて下田さん昨日の日曜を獨り窃かに寶

塚へでばる。少女歌劇の樂屋口の電柱の蔭で新らしい麥稈帽子を氣にして被り直し乍ら女優の歸りを待ち受け。梅田まで尾行して來たがとうとモノにならず、曖昧パーでイチャツイで少しくむしやくしやを慰めて歸る。

井川さん未だ夕刊寶の借金を返済せず。婆さんに同情をして義捐金を據出して授る。井川君その義捐金迄着服して、

『アノ婆さんいつ見ても居よれへん。』
あそこを通る時には窓の下へ顔へ隠すのがもう常習性になつて了つて居るのである。

夜業の手傳ひに來だした藤田君茶を汲みに行つてビールの瓶を見付けた。

『おや麥酒がおまんなあ、御馳走はん。』

『あゝそれは進藤君のやせ、今日商業學校へ行つて貰うて來たん、忘れて歸んだんやな。』

下田さんは慙う斷つた。

『進藤さんのならだんないわ呑んだれ。』

藤田君が關はず呑もうとすると黒井君も傍へ來た。

『おい俺にも呑ませい。』

『まて、俺が先やせ。』

藤田君はニコ／＼顔でコップを口へ持つて行つた。そしてガブツと一

口呑んで忽ち血相をかへて吐鳴つた。

「悪い奴ちや、うまい事欺しよつたなあ、水やがな。」

黒井君面白そうに手を打つて、

「水やあれへん、よう味うて見い、小便入れといたつてんがな。」

「あ、ブルツ。」

藤田君狂氣の様に手洗場へ飛んで行つて、

ウガイをした。

池長君社用でもつて三ヶ月ばかり三島へ行く事になつた。『三島女郎衆か、好え處へ行くねんなあ。』と皆んなに羨ましがられて矢鱈に勇み立つて了つた。向ふへ行くと女が鈴なりに出来る様な氣になつて頻りに洋服

屋へ御誂へのレインコートを催促をしたり靴屋へ電話をかけたたり尺八の譜を整理したり大騒ぎ。

池長君レインコートが出来て来たので嬉しくつてたまらず、停車場へ出しに行く手紙を何日もなら給仕をやる處をサツサとレインコートを着て自分で出掛けて行く。もう一軒株券を届けに行く用もあつたので其れもレインコートを着て行こうとしたが今度は帽子を脱ぐので禿げの隠しかたに一思案。電話口へ行つて、

「モシ、貴方の處へ行くのは電車は何處で降りまんねん。」

先方の聲が書生らしいドラ聲だつたのでツマラナ相な顔をして給仕に「おい、ちよつと之れを届て来てんか。」

池長君晝過ぎになつても會社へやつて來ず。今夜出立だのに怎うしたんだらうと使を出して尋ねると。朝八時に水盃をして年取つたお母さんと盡きの別れの涙に咽んで其れからレインコートを着込んで社長や専務の宅へ挨拶に行くと云つて出て行つたとの事、いよいよ出發と云ふ時に支配人河村君に、

『下りの汽車に乗るかも知れんから君行つて汽車へ乗せてやつて呉れ給へ。』

蚊の話が出る。佐原さん話に油が乗り出して、

『天下茶屋の蚊はほんとに酷いんだ。大きな奴がブン／＼飛んで來るん

だもの、まるで牛位あるねえ。』

『そらあ世話が無くてもよろしいな、蚊帳を吊つたりゑぶしたりせんでも入口さへ締めといたら這入れまへんなあ。』

西久保君巴里土産だと云ふタオルの様な大ネクタイを持つて來る。川井君感心して、

『西久保さんはネクタイ迄大きいんですねえ。』

『絨氈の切れつばしだらう。』

進藤君が鑑定をすると佐原さん、

『敷布だよ、毛唐のダブルベッドの敷布なんだよ。』

まさか敷布を首へ巻いて歩く奴は有るもんぢやあ無い。

池長君に寄せ書を出す。

頭禿げても心配するなレーンコートで埋めがつく。

主は今頃起きてか寝てかレーンコートでぞめいてか。

江戸安の小僧が来て、

「進藤はんと云ふお方ゐやはりまつか、仲居はんが表へ来てはりまつさかいに一寸會ふたげとくなはれ。」

進藤君妙な顔をして出て行く。アトで皆んな仲居て誰れやろう、お愛さんか、お玉さんか、兎に角お汁粉に有りつけるなあ、とテグスネ引いて吉そうを待つてゐると進藤君歸つて来て、

「いけないく、舊悪露顯だ。」

進藤君もう二月程前に友達を伴れて呑みに行つた勘定が付け落ちになつて居たのであつた。

「ハ、ハ、何日かの口か、昨夜の夢見が悪かつたろう。」

「なあに損はしないから好いや、只儲け損なつた丈けだもの。」

佐原さん剛健なる精神の涵養を説いて呑み會を廢して旅行會にしよう
と頻りに唱導する。

「旅行はよろしいなあ。」

井川君が雷同すると西久保君は、

「射撃もいゝですよ。」

皆んな口では頻りに剛健なる精神を唱へるが幾度日曜が廻つて來ても住吉公園へも誰れも行かうとしない。實行家の西久保君大に憤慨して今日會社を休んで剛健なる精神の鍛練に行く。

「おい姐さん敷島一つ當つたせ、もう三發打つせ。」
況んぞ知らん西久保君の剛健なる精神は價三發で五錢、當れば敷島一つ也。

大阪を立ち退いて

大晦日の梅田驛、朝寒のプラットホーム、私は空洞の様な心で上りの列車を待つて居た。

「大阪を立ち退くのか。」

思はずためいきが私の口を衝いて出た。見果てぬ夢を残して、この懐かしい心の故郷を立ち退くのかと思ふと、もう運命を呪はずには居られなかつた。

だが其の運命は誰れが作つた。自分ちやあ無いか。自分で勝手に招いた運命なんぢやあ無いか。いや／＼さうぢやあ無いか。神様のせいだ。人間に性と云ふ物を附與した神様の罪なんだ。「性」は人間の身體に宿り乍ら、人間より遙かに強い物なのだ。性の慾求は人間の力では到底抑へる事の出来る物ぢやあ無いか。

「君はつまり意志が弱いのだ。」

「私は餘り意志の鞏固な人間には成り度くないのです。」

Sさんの意見に對して私は恚う答へたのであつた。そして空嘯ぶいた。

「若い者の失敗は皆んな女のせいであらう。」
見送る人と見送られる人との別離の挨拶が其處此處に聞える。プラットホームには幾つかの人群が互に別れを惜み乍ら汽車の來るのを待つてゐる。

私の頭には此の春、矢張り私の様に大阪を立ち退いて行つた岩井サンの出達の夜の光景が不圖浮び出した。見送人は大勢ゐた。そしてその裡にはワザと束髪に結び直して、ジミな着物を成る可く野暮に着こなして見送人の集團の後ろから窺かに涙を以て岩井サンを見送る若悦さんの姿が本統にいちらしかつた。

『此方へお出でよ。』

私は若悦さんの手を引いたら、若悦は最う堪り兼ねると云ふ風に今迄

眼の裡で堰いて居た涙を一度にドツと顔の白粉の上へ流し出した。そして私の導く儘に伴いて來た。私は若悦を見送る集團から一寸離れた——つまり汽車の窓から首を突出して居る岩井さんか——一寸離れた——然し車體には近い場所へ導いて來た。そこは柱の蔭になつてゐて見送人達の視界からも遮られて居た。それが人目を憚る若悦の心には私の處置を他の見送人に對する氣兼ねからだとも思つたのだらう。若悦の眼からは又止め度なくさめ／＼と涙が流れ落ちた。

列車は靜かに動き出した。岩井さんは車窓から半身を乗り出して見送の人達の前を迂つて來た。そして私を若悦との前に來た。私は熱い訣別の情を置めた右の掌を差し延べて待つてゐたので岩井さんも直ぐに握手の爲めに手を差し出した。私はその岩井さんの手を直ぐに若悦に譲つ

た。若悦は岩井さんと握り合つた手を容易に離さうとはしないで、チヨコと小走りで二三間ばかりも出て行く汽車に随いて行つた。カラコロと日和下駄の齒がブラツトフォームの敷石に鳴つて行つたのだ。其んな追憶を呼び起して呆乎と突立つて居る程に、物凄く様に空氣を動揺させて汽車は矢庭に這入つて來た。

妄想から醒めた私は、慌て、乗ろうと先をさせる人達を乗せ切つて了つて、一番後から悠々と客車に這入つて行つた。そして御納戸色のクツシヨンにごぼつと身體を埋めた。

『之れで最う今夜つから東京の人間か。』

さう思ふと何だか恚う肩の重荷をおろした様な氣樂さを覺へ出した。早く乗り込んだ人達は未だ赤帽から荷物を受取つて棚へ載つかけたり、

窓際に立つて見送りの人達に挨拶を交はしたりしてゐる。私は荷物一つない。見送人一人居ない。そして三年の間住み馴れた大阪を立ち退いて行くのだ。オーバーコート、の衣囊に手を突込んだ儘、車窓に凭れて同車の人達の所作を面白さうに眺めて居ると昨夜の見送人に一寸濟まない様な心持が湧いた。待呆けを喰つた私の悪友や善友達のけつたいな顔がそれから其れへと眼の前に立ち代り入れ代り浮んで來た。

私は昨夜の七時に立つ豫定で周圍にも吹聴して置いたのだ。そして本統に燈火が點くか點かない時分に荷物と俵を列ねて停車場へ來たのであつた。そして荷物を手荷物に托けたのだが其時一緒に、列車へ持ち込む積りだつたトランク迄も序に預けて仕舞つたのだ。

私は全くの身體一つ切りに成つて了つた。急行券も買つた。もう安心

だ何日でも東京へ歸へれると思つた。すると又何日東京へ歸つても好いんだと云ふ考へが頭に閃いた。氣が軽くなると惡戯心と浮氣心とが一緒にむらむらと念頭に湧き起つた。

大阪に於ける最後の惡戯に一つ見送に來る奴等に待呆けを喰はしてやろう。愉快々々。心にさう思つた時には眼の前にははま子の幻がちらついて居た。

私は矢庭に帽を眉深かに引き下げ、オーバーコートの襟を立て、頤を埋め、人目を避けて飛鳥の様に難波行の電車にヒラリと飛び乗つたのであつた。

不圖そんな事を思ひ出して呆乎と考へを趁つて居るとりんくと電鈴が鳴り出した。いよいよ大阪を離れる時が來たのだ。

やがて一聲の汽笛を合圖に列車は緩く動き出した。澤山の人の澤山の見送人の顔が車窓を這つて行つた。實に種々雑多の顔を閲た。だけでも私の知つた顔は一つも無かつた。懐かしいのは却つてプラットホームの廣告の繪だつた。その裡に懐かしい北野の街が車窓に現れ出た。それから淀川の鐵橋のトラツスが目まぐるしく車窓を通り過ぎて行つた。とうと大阪を離れて仕舞つた。

ホツと思はず溜息が口を衝いた。私は漂然と立つて食堂車へ入つた。オートミールが馬鹿に甘かつた。全く今日の私の身體にはオートミールが甘く味はへる條件が兼ね備はつて居たのだもの。

白い大理石の食卓に對つて、白いナプキンを胸に當て、銀色のスプーンで、牛乳のかゝつた半流動體を口に流し込んで居ると吹田のアサ

ヒビールの建物が窓の外を流れ去つて行つた。夏の暑い日に、よく小川さんに誘はれてあそこへ行つた物だつた。歸りはいつもどろんけんだつた。眼を醒まして見ると梅田へ歸つて一二等待合の長椅子の上で寝て居た事もあつた。

さう云へば昨夜も私はどろんけんだつた。何時酔つたのか譯分らずに酔つて了つた。氣のついた時にはチャンと京末へ行つて寝て居た。例の牡丹模様の紅友禪の夜具を着てはゐたが身體はホワイトシャツや洋袴や胴衣に包まれて居た。そして枕許にははま子が行儀よく座つて居た。

うんさうだ。私は思ひ出して上衣のポケットを探つて見た。

丁度其時ボーイが新しい皿を運んで來たので追憶は一寸とぎれた。今度の皿は赤いハムの上に半熟の玉子が二つ眼を剝いて居た。之れに對

しても私の身體は條件が好いのだなと思ふと又直ぐに心は先刻の追憶の跡を追つて行つた。

私ははま子が定式幕の紙入の底に、電氣寫真とかと云ふ小さな寫真を持つて居た事を思ひ出して其の紙入を開けて見た。未だ在つたので早速それを取り出した。三の糸が一緒につひて來た。

『何しなはんねん。いけまへんせ。』

私とその寫真をポケットに入れたのを見ては、ま子は取り返そうとした。

『貰つとくんだよ、いゝぢやあ無いか。』

『いけまへん、いけまへん、寫真あげるとな縁が切れる云ひまつさかいな、妾いやゝわ。』

『そんな事が有る物かい、莫迦々々しい。』

何でも無い口吻で恚う答へたが心は衝動に脅かされたのであつた。それから未だはま子は氣味の悪い事を云ひあがつた。

『本統に東京へいになはんの、うふ。』
恚ふ幾度も幾度も繰り返してはべそをかいた。

『東京へ行つたつて直ぐ歸つて来るよ、四日の日には歸るよ、歸つたら直ぐ此處へ来るからね。』

『その四日迄が長い様な氣がするわ、なあ、もう一日流連しなはれな。』
そんな手管や止め立てを遂ぞ一遍だつてした事の無い妓だつた丈けにその言葉が怖ろしかつた。

『え、い酒だく。』

私はとうと大阪との執着とははま子との離愁とをやつとの事、酒で抑へつけて遁げ出して來たのであつた。

夢だく、全てが夢だく。

ボーイが私の前の珈琲の茶碗の空をさらつて行つた。大理石の食卓の上にはバナ、の皮が残つて居る丈けだ。

『むかうまち』と書いた白い札とブラットフォームに並んでる五六人の田舎風の人の姿とが車窓を掠めて去つた。

大阪を立ち退いて、扱てそれから私の生活は……。

船場の正月

テトントもち米。糸ざくら

助さん小間物。賣らんすか。

私はこの頃。出世して。

大金持に。成駒家。

テレンツトントン。

奥から賑やかに聞えて居た手毬唄がはたと止んだかと思ふと市松人形が箱から抜け出した様な嬢さんが友禪の大振袖に羽子板を抱へて店へ出て参りました。二枚折の金屏風の前には緋の毛氈が敷いてありまして高脚の三寶に鏡餅が飾つて御座います。その前で鼠の紋服に角帯をしめた丁稚が蒔繪の文臺に載せた名刺入を控へて、宣徳の火鉢にあたり乍ら請附を勤めて居りました。

「チヨイト金吉どん羽根突きせういな、あんたの羽子板持つてお出で

え。」

嬢はんは溶ける様な言葉でその丁稚に恚う申しました。

「未だ御人はん來やはるや知れまへんさかいな。」

金吉は恚う云つて一寸躊躇いたしました。

「かめへんがな、お人はん來やはつたらヂツキ止めたげるがな。」

嬢はんは無理に金吉を引つ張り出しました。表には定紋を染めた幔幕が張つてありました。出入口の所丈け絞つて其處へ國旗と高張とが出してあります。白い盛砂の上に樹てられた門松には竹と梅とが添へて御座います。

「好う舞うように、好う舞うように。」

嬢はんは五色に染めた突羽根の羽一枚々々に恚う念じてはハアツと息

を吹き込んで、

『金吉どん、負けなはつたら白粉つけまつせ。』
と断つて追羽根が始まりました。

ひとめ、ふため、みやこし、嫁御、いつやの、むかし、七やの、薬師、九ツ、とうを。

嬢はんが駆け出すとぼつくりの底から涼しい鈴の音がチャラ／＼と突羽根の音にからまりました。

十日夷

十日夷の賣物は、はせぶくろにとりばち錢がます。小判に金箱立烏帽子、ゆでばすさい槌束ね熨、お笹を擔げて、千鳥足。

十日戎の賑ひは本統にこの地唄その儘で御座います。大阪の人は金の爲めに生きてゐるのです、負惜しみの強い江戸ツ子の様に意氣だの張りだの名譽だの趣味だのと氣障な事を云つて本心を胡麻化そうなんて偽善的^{てき}な了見^{れうけん}は持つて居ません。

金より大切な忠兵衛さん——

梅川は心中する程惚れ込んだ戀人を恚う呼んで居ます。

使ひ果して二分残る——

忠兵衛もまたいくら自棄糞になつてもスツカラカンには成りません。そこが大阪氣質です。朝の湯錢に困ろうとも宵越しの錢は持たねえんだい、と痰呵を切る江戸ツ子に江戸ツ子の意氣地が有れば、自棄になつても二分のこす贅六に贅六の身嗜み^{みたしな}が有るのです。

金、金、金は大阪の命です。金儲けの神様の戎様は實に大阪の守護神です。未だ屠蘇の酔の醒の切らない正月十日、逸早やくもその祭禮が執り行はれる。大阪の人は何を置いても戎様丈けには是非參る。福、徳、欲、そうした念に驅られて百七十萬の大阪人は此の今宮へ雪崩れ込んで来る。

露店の賣物も小判、金箱、立烏帽子、いれ枱、さい槌といったもの、それ等を結ぶた一枝の笹を擔いでおし合ひへし合ひ歸つて行く人雪崩れを、

『寶惠駕はい、寶惠駕はい。』

と勇ましい掛聲が分けて来る。紅白の縮緬で巻いて花を飾り付けた駕に紅白紫緑の春着に花を簪して載つて居る藝者。赤い鉢巻、友禪の袖を

片肌脱いだ幫間がかついで行く。

曾根崎の春宵

『又た若悦が這入つて来て書き物の邪魔をして行きあがつた』

こんな日記がついてる頃がなつかしい。三階の騒ぎを他所に聞き乍らその下で私はいつも原稿紙を擴げて居た。曾根崎新地よ、お、私にはほんとに懐かしい名だ。若悦はどうしたろう、桃吉はどうしたろう、清糸さんや花千代さんよ。

それにつけても美しい記憶は春の踊の時分の新地の情景である。『なにはおどり』と一字宛書いた大提灯が街の入口に掲げられてその前にその日の踊りの番組が貼り出される。

「今日は呂之助は出やはれへんな。」

「その代り綾若はんの立唄だんがな。」

こんな話をして行く娘さんがある。たゞさへ艶めいた街に紅で筋を入れた提灯と浪花踊と書いたびら繪が軒並に吊るされて如何にも華やかになる。演舞場は圍ひを取り拂つて匂ふ様な藤原式の建築がアークライトに白く映し出される。行つては歸る人の波。

「天満つる神の宮居の町つゞき春告鳥も北の里梅田を右にさくら橋堂島川の川波に人氣の潮おし照や浪花おどりの一節に田鶴も立ち舞ふ夕かな。」

浪花燕脂色の衣裳に糸錦の帯を文庫に結んで歌舞の菩薩の總踊り、それ丈では曲も無しと其處らのお茶屋へ立ち寄ると、

「ほんまに踊りはお茶屋泣かせだす、あんなもんがあると藝妓が出来るで難儀しまつせ、一流二流は踊りに出て了ふ、出番でない妓や明いてる妓も見物に行きまつしやる、來て呉れはるのは難有うおまつけど藝妓を拵へるのに横生しまんねん。」

お茶屋の女將は愚痴たら〜。踊りがはねると一時にワツと藝妓が湧いて來る。

白粉を濃く塗つて鬢下地に結つた妓が一人二人混つてゐるのも此の頃特殊の情調で何となく面白い。そしてそんな妓はきつと美しい。

牡蠣船

大阪の橋の下には大概この牡蠣船が附着してゐる。

私はその船の底で川の面を眺め乍ら盃を執るのが大好きである。晝間はすいてるので寝つ轉がつて酒が呑める。モーターボートが川波を切つて行くと長江に浮んで居る華舫の様な牡蠣船もゆらりと動揺する。その揺れ心地が如何にも呑氣でいい。

貝蒸しの口を押し開けて裡から小さな身を引き取り出して喰べては盃を甜めてると近松門左衛門も恁んな事をやつて居たんぢやあ無いかしらんと云つた妄想が湧き出して来る。昆布を敷いた鍋で牡蠣を鹽で煮乍ら紙屋の治兵衛さんもこんな事をやつて金の才覺を考へ込んで居たんぢやあ無いかと考へ出された。

兎に角牡蠣船は呑氣なとこだ、それが生命だ、水の流れを見て暮すと云つた手合ひには御あつらへ向きの小天地だ。だが徳利が小さい。持つ

て見ると重い癖に酌いで見ると空つぽになつてる。どこの牡蠣船の徳利も皆んなそれだ。

『おい／＼君んとこの徳利は上げ底がしてあるのかい、四杯ついたらもう空だぜ、その癖重いや。』

酔つたはずみにお里を出したら仲居笑つて、

『船は揺れまつさかないな、ひつくり返らん様に牡蠣船の徳利は皆んな底を重うしておまんねん。』

『そうか、起き上り小法師の徳利か、考へあがつたな。』

それで私は手を打つて感心して了つた。そう云へば怎うも牡蠣船は女中も皆んな尻が大きい様だ。あれも矢つ張りセンター、オブ、グラビチの關係か。

櫻の宮

その頃の櫻の宮は未だ櫻の彩りに生きて居ました。淀の河瀬は白い帆を浮べていとも長閑に流れて居ました。大長寺の古めかしい板塀の裡には小春と治兵衛とが未だ安らかに眠つて居ました。凡ての物が皆なゆつたりして居ました。

櫻の宮は丁度名所圖繪をさながら形に表はした様な、閑静な、幽佳な詩の郷でした。

私はその詩の郷で七歳の冬から十歳の春迄生ひ育つたのでした。何でもあの前庭に椿の樹があつて、裏に大公孫樹が魔の様に突つ立つて居る藍色の壁の二階家へ引越をした其の日の事の様に覺へてゐます。

私はお父さまと夕陽の光りに長い影を引づつて物珍らしげに河原を散歩致してました。河原は淀の河幅の三分の一程を占めて茶褐に枯れた雑草が狐の毛皮の様にしなやかに其れを被つて居ました。所々黒い焼跡が大きく擴がつて居るのは村の兒たちがとんどを焚いた跡なのです、楊の木立が氣紛れに堤から水に續いて居るのは河原の土の柵なのです、そしてその先には石で疊んだ突堤が柵となつて流の真中に飛び出してゐました。私は最う此の目新しい風物に悉皆知りはいやいで了つて、お父さまの廻りを犬の子の様に飛び廻つて居ました。

『まあちゃん。』

不意に私は誰れかに呼びとめられました。その聲が怎麼に私の耳を驚ろかしたでせう。私は飛び上つて聲のした方を視ましたら、それは矢つ

張し尋常一年の中井だつたのです。

「君、遊びに来たん？」

中井は恚う尋ね乍ら私の傍へ駆け寄つて来ました。

「僕今日あの家へ引つ越して来たんや。」

私はそう云つて銀杏の樹の下を指しました。

「そうか、僕とこはあれや。」

中井は私んところから一町ばかり北の方を指さしました。

私も中井も軍人の子弟の爲めに設けられてある階行社の附屬小學へ通

つて居ました、それで八歳の小兒にしては生意氣な口な利き方だつたの

です。

「明日つから誘つて呉れ給へよ。」

「僕が誘ひに行く迄待つて、呉れ給へよ。」

小さな誓ひを交し合つて二人はやがて私の門口で別れたのでした。

翌る日から二人は山櫻の徽章の獨逸帽、赤い側章の半洋袴、紺と黄と

のダンダラの靴下、毛皮の背囊を背負つて何日も一緒に十町餘りの道を

學校へ通ひました。近所の兒供は皆んな村立の野田村小學校へ行つてま

すので中井より外には一寸友達が出来そうにも有りませんでした中井ん

ところには小猿が二疋居ましたので私は人參を買つといつて貰つては其れを

持つて中井んとこへ遊びに行くのでした。裏には廣い庭が有りまして裏

門を出ると小さな河が流れて居ました。庭を掘ると屹度蛇が出て來まし

た。冬の蛇は意氣地が無いので丁度いゝ玩具でした。赤い舌をペロ／＼

と出して憐れみを乞ふのも關はず口へ竹を突きさしたり、眼を吹矢で射

たりしては裏の川へ流してのた打ち廻り乍ら流れて行く姿を楽しんだのでした。そして其の惨忍なお道樂の爲めに廣い庭中を滅茶苦茶に掘り散らかして大事な植木の株を掘り起したり植木鉢を叩き割つたりした物でした。

私と中井君とは悪戯も一緒にしましたが又勉強も一緒にしたのでした。隔日に中井君は学校の歸りを私の家へ寄りました。そして書生に見て貰つては第一課を私が読んで解釋をすると第二課を中井君がやると云ふ拍子で御復習をしたのでした。

『ころばぬさきのつる』と云ふのが修身の第十八課に御座いましたが、私も中井君も此譯が幾度聞いても分りませんでしたので互に、

『僕が始めるせ。』

お母さまは慌て、私の言葉をお叱りになりました。お師匠さんは平氣の平左衛門でツカ〜と上つて行きました私の得意は益々たかぶつたのです。

『お母さま大丈夫よ、先生は聾ぢやあ無いの。』

『人を侮どる物ぢやあ有りません、悪口は聽えますよ。』

私は驚ろいて聲を窃めて尋ねました。

『ぢやあ聾つてえ物は悪口丈けは聽へるの。』

『そうだよ。』

お母さまは五月蠅そうに恚う云ひ捨て、お師匠さんの跡をお追ひになつたのでした。私の幼い頭にはそれから長く聾について不思議が蟠まつて居たのでした。

「僕に第一課をやらせ給へ。」
と何日も極つて「一が赦した、二が赦した。」をする様に奇数の課程を争つた物でした。

その時分お母さまは生花の稽古をなさつて居ました。御師匠さんは聾だと云ふ事でした。或日の事私が尻を持って飛び出そうとする處へ出會頭に生花の先生がおこそ頭巾を被つて杖をついて這入つて來ました。私は聾と云ふ者は耳が聴へないんだと云ふ大智識を持つて居ました。そして計らつてもそれを誇示す可き機會に遭遇したので得々として吐鳴りました。

「お母さま、聾の先生が仰居いましたよ。」

『これ、何を云ふんだ、お莫迦さん。』

お母さまと一緒に花鋏をチャキ〜云はせて河原の楊の茂を掻き分けて生花の股木を探して歩いた事なんかも餘座いました。その楊に青い芽が萌える頃には堤の櫻も匂ひ出すのでした。

太い幹に青い苔を宿した老樹の枝にひそひそと蕾が生長を遂げて、並木の梢が一體にほをつと赤味を帯び出すと河原に掛茶屋や馬場が出來て赤い前垂れをした若い姐さんや、鹿毛や栗毛の老いぼれ馬がこの詩の郷へ流れ込んで來るのです、そして櫻の宮神社の境内には覗きからくりや見せ物の小舎が建ち並ぶのでした。

やがてお花見の群衆が詩の郷の静寂をぶち破つてぞろ〜と押し寄せて參ります。河原の掛茶屋には酒の匂が漂つて、流しの三味線が四邊を徘徊し出します。黒山の人だかりに心をひかれて飛んで行つて見ると、

其れは屹度喧嘩なのです。あれくと指す空を見上ると赤や紫のゴム風船が糸を切つて飛んでゐます。私はまた馬丁に轡を執つて貰つて、貸し馬の鞍にしがみついて馬場を廻ると云ふお道樂を覺る出したのでした。

『花は結構だが、騒々敷んで閉口だね。』

『掃いても掃いても直きに又せんぐり砂埃が舞うて來まつさかい、せうがおまへん。』

お母さまとお鶴とは毎日憊う云ひ合つて花を恨んで暮したのでした。

表の眺の櫻が散ると今度は裏の三州平原に菜の花の黄毛氈が敷きつめられます。

『鬱金の海だね、まるで』

お父さまは裏座敷から生駒の山の麓までひたくと湛へられた、咽ぶ

ばかりに香の高い菜の花の海を見惚れては、何日も憊う仰言るのでした。そしてその頃にはよく家中擧つて野遊びに出掛けた物でした。

淀川堤を上へ上へと上つた事が御座いました。花見の人は大抵は櫻の

宮神社で引返して了ひますが、花をつけた樹は未だ先まで續いてました。

櫻が盡きると河原も盡きて堤の裾を柵が固めます。淀と云ふ名が付いた

程の穏やかな河瀬も伏見通ひの蒸汽船の外輪に搔き立てられては柵に白い泡をさつと飛ばすのでした。すると橄欖色の翼の小鳥が驚いた様に

鳴きつれて飛び立つのです。流れには白帆が長閑に浮んで、河向うの野からはしづ心なく春を謳歌する雲雀の唄が聞へて參ります。墨繪から抜

け出した様な曳船の人が五六人、綱を肩に船を曳て聲も掛けずに私達を